高松市埋蔵文化財調査報告　第109集

史跡高松城跡整備報告書　第２冊

石垣基礎調査報告書

第２分冊

２００８年2月

高　　松　　市

高松市教育委員会

史跡高松城跡整備報告書　第２冊

石垣基礎調査報告書

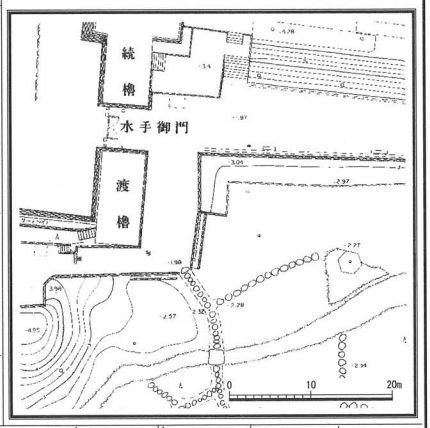
第２分冊

2008年２月

高　　松　　市
高松市教育委員会

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3053	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	内				石積工法	布積	
方　位	南				角石(算木) 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無				刻　印	無	

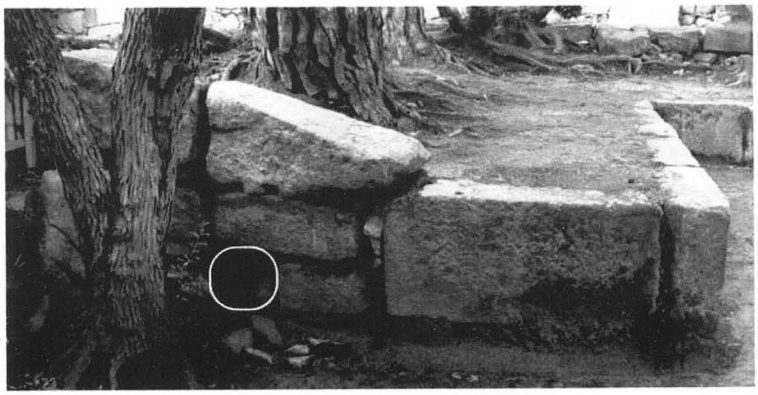


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好	s3										a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.03	0.4/2.61	0.62	0.62/0.96/0.84	0.67	80	87	-4	89	-1

築造時期	新郭造築期	改修	基底部
修　理		文献資料	
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



ヌケ

※列石状だが埋没部は不明

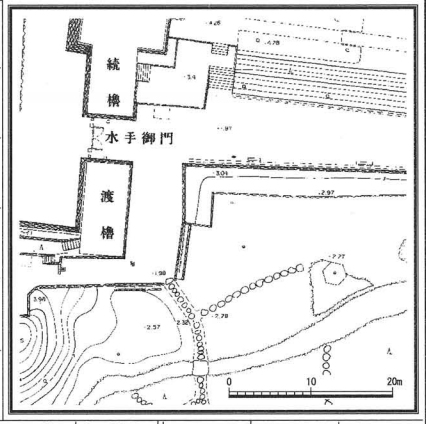
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の庭園北側の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.0m、全長は約3.0mである。 ・勾配はわずかに逆勾配である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は直方体の形状のものが多いが、三角形のもの等見られる。規模は大小混在する。 ・庭園の縁石状の積み方である。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3054	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	内				石積工法		布積	
方　位	東				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	塀				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.92	4.01	0.65	0.61	0.53	-1	-1	-2	-1	90

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

※列石状だが埋没部は不明

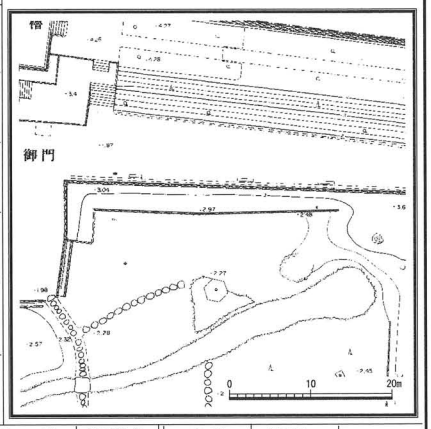
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の庭園北側の東面内石垣である。 ・高さは中央部で約0.6m、全長は天端で約3.9mである。 ・勾配はわずかに逆勾配である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は直方体の形状で、規模は標準的なもので揃っている。 ・庭園の縁石状の積み方である。 ・左隅角は埋没のため算木積の状況は不明である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3055	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		切石、割石	石垣位置
石垣部位	内				石積工法		布積	
方　位	南				角石（算木）	左		
角の形状	左隅角	入				右		
	右隅角	すりつけ			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印		無	

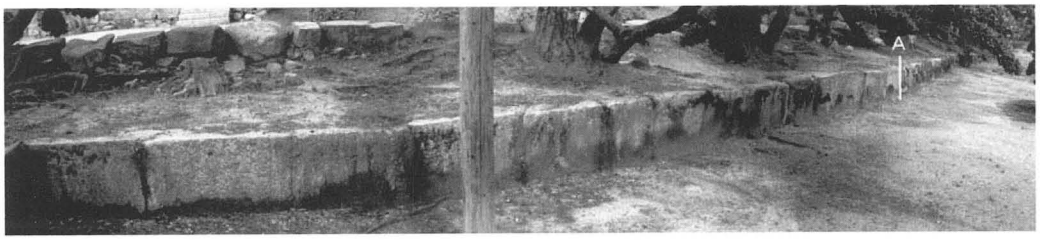


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好	t1										a3	b3	D

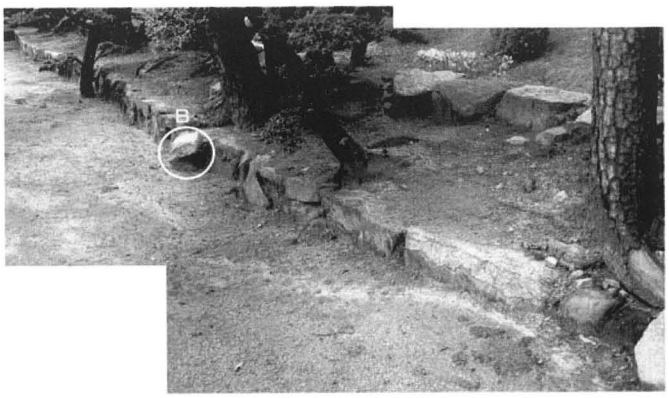
石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		36.3	30.3	0.53	0.53	90	90	90	90	90	90

築造時期	新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．このラインより角度がかわる
左側は切石１石を立てて並べる
右側は切石、割石など１～２段で
右へいくに従って石垣高さが低く
なっている
B．倒れる



※列石状だが埋没部は不明

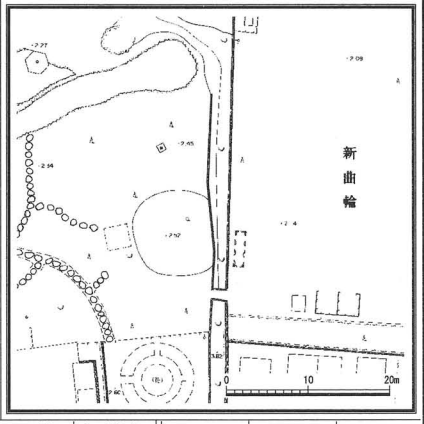
備　考	10.88/9.42/10.00折れ、一石のみの石列計測不可	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の庭園北側の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約0.5m、全長は天端で約36.3mである。 ・僅かに折れが見られ、左端から約10.9m、9.4m、10.0mに細分できる。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は左半は花崗岩の切石を用いた布積で、右半は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。埋没部は不明であるが、現状では一石のみの列石状の石垣である。左隅角は入隅で、右隅角は地盤にすり付けである。 ・石材は左半は標準的な大きさの直方体の形状のもので、右半は不定形でやや小ぶりなものが見られる。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・新郭造築期に築造されたと考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると、中央部に雁木状の施設が描かれており、明治以降に積み直されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3056	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	乱積	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石(算木) 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

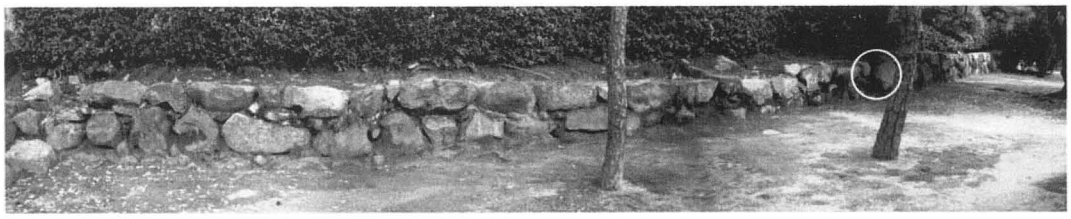


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s1										a2	b3	C

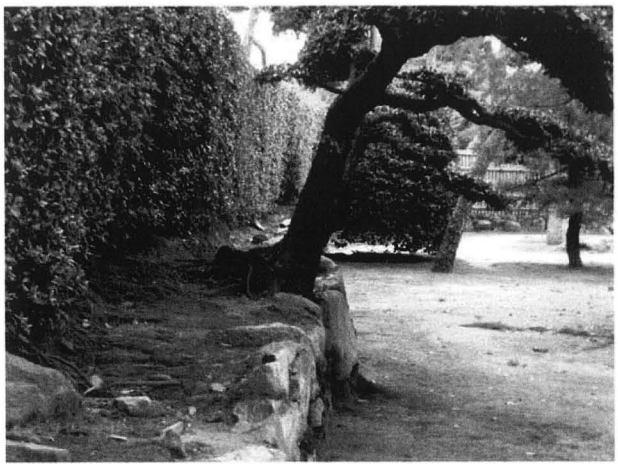
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	25	25.1	0.37	0.64	1.02	-	86	80	85	81

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



樹木で石が押し出される



※石材の斜め使いがみられる
当初のものか不明

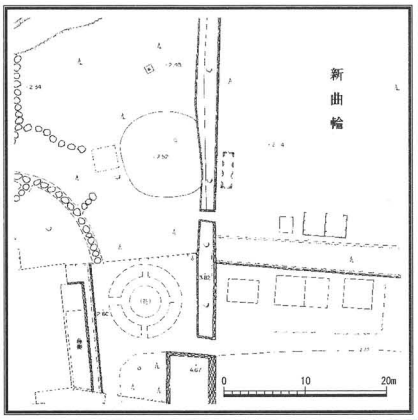
備　考	左角勾配一石のみ計測不可	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の庭園内東側の西面内石垣である。 ・高さは中央部で0.6m、全長は天端で約25mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は地盤にすり付けである。全体に石垣面の出入りがあり、天端も不揃いである。 ・石材は不定形の形状のものが多く、規模は大小混在する。 ・庭園の縁石状の積み方である。 ・右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・天端石の欠損が見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・新郭造築期に築造されたと考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると、折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは、一連の石垣として描かれており、明治以降に積み直された際に開口され、分断されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3057	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	門（後世のもの）				石積工法	布積	
方　位	南				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.72	2.12	1.01	1.11	1.48	81	84	－	85	72

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

※後世の開口部と思われる

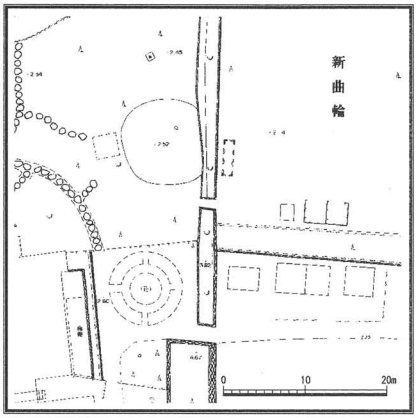
備　考	短い石垣のため中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の東側に位置する開口部の南面石垣である。 ・高さは中央部で約1.1m、全長は天端で約1.7mである。 ・勾配は85度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。左隅角は切石、右隅角は割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は大小混在する。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは一連の石垣として描かれており、明治以降の開口に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3058	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	門（後世のもの）				石積工法	乱積	
方　位	北				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s3			a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.47	2.07	1.41	1.21	1.78	75	82	87	90	85

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．間詰石のヌケ
B．開口前の石垣の痕跡が残る

※後世の開口部と思われる

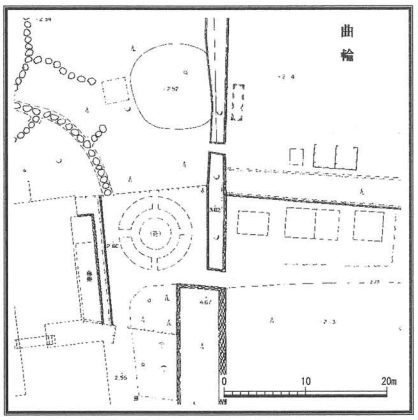
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の東側に位置する開口部の北面石垣である。 ・高さは中央部で約1.2m、全長は天端で約1.5mである。 ・勾配は87度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は大小混在する。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは一連の石垣として描かれており、明治以降の開口に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3059	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	谷積	
方　位	西				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

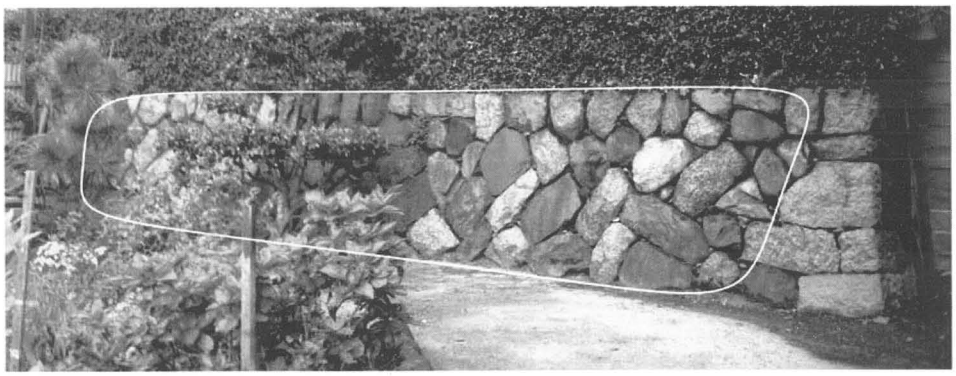


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	14.12	14.31	1.26	1.32	1.52	85	84	79	84	83

築造時期	新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



谷積

※後世のものと思われる

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の東側の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.3m、全長は天端で約14.1mである。 ・勾配は79度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた谷積であるが、左隅角付近は乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形や、やや扁平の形状であり、規模は標準的なものが多くほぼ揃っている。 ・左隅角は算木積になっていないが、右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・新郭造築期に築造されたと考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは一連の石垣として描かれており、明治以降に積み直した際に開口され、分断されたと考えられる。また『旧高松御城全図』では、石垣の東西幅が広く描かれており、当初の石垣はもう少し西に位置した可能性が考えられる。

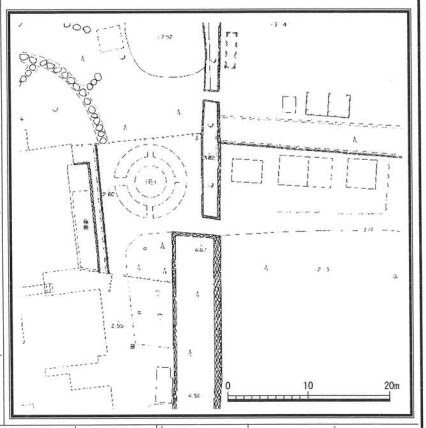
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から右上がりに天端まで至る目地	上方	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石布積	上方の積み直し
	下方	花崗岩	方形割石		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3060	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石
石垣部位	門（後世のもの）				石積工法	布積
方　位	南				角石（算木） 左	切石
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	切石
	右隅角	出			その他特記	
上部構造物	－				石材	花崗岩
転用石	無			刻　印		無

石垣位置

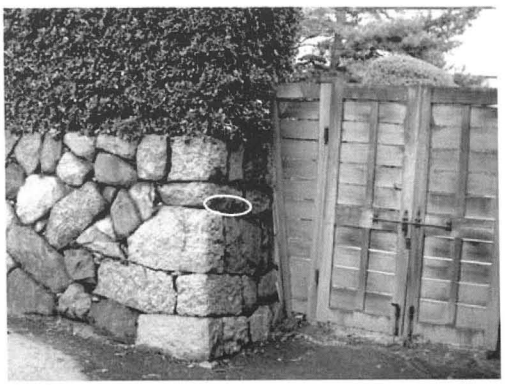


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

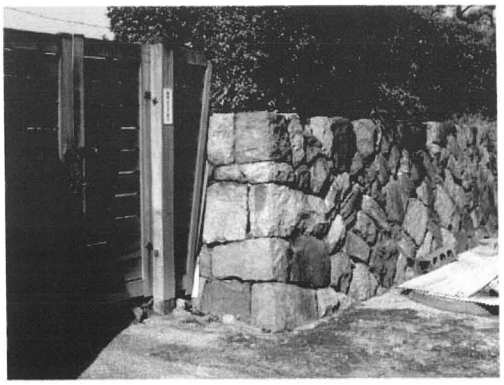
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.65	2.1	1.51	－	1.56	83	84	－	83	79

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



矢穴



※後世の開口部

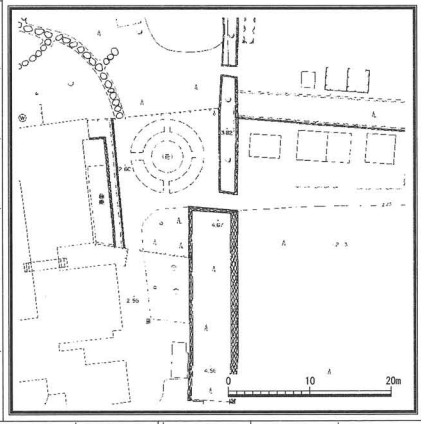
備　考	短い石垣のため中央高・中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の東側に位置する開口部の南面石垣である。 ・高さは中央部で約1.5m、全長は天端で約1.6mである。 ・勾配は84度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形や、やや扁平の形状であり、規模は小ぶりの石材が多く見られる。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは一連の石垣として描かれており、明治以降の開口に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3061	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石、切石	石垣位置
石垣部位	門（後世のもの）				石積工法		谷積	
方　位	北				角石（算木）	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩、安山岩、凝灰岩（一部）	
転用石	無			刻　印			無	

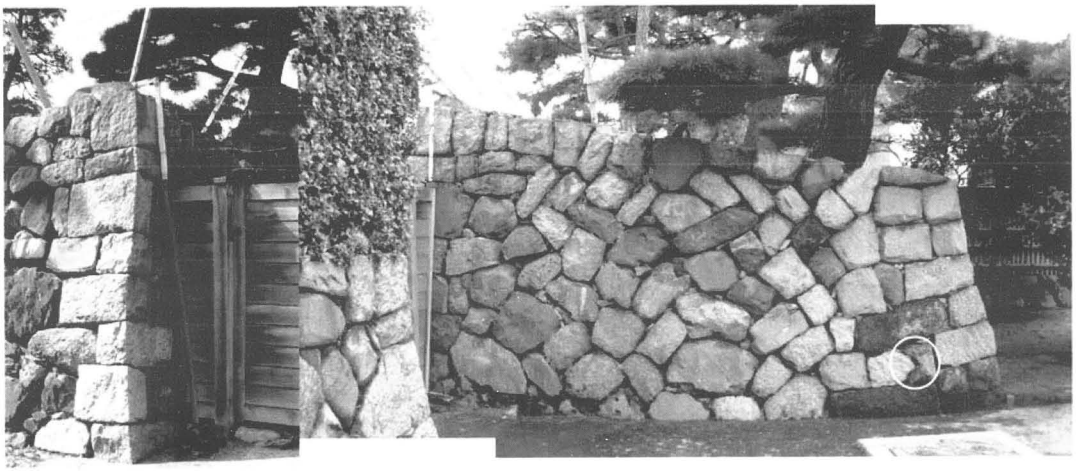


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.83	5.86	2.77	2.26	1.93	72	82	83	84	75

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



転用石か？
全体は谷積で後世のもの

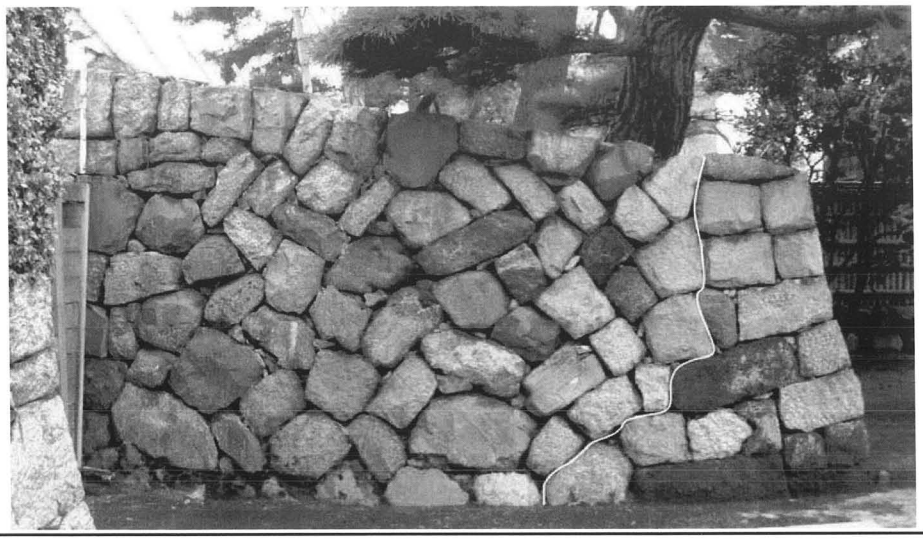
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

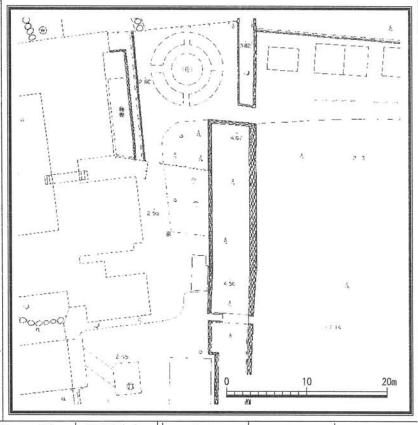
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の東側に位置する開口部の北面石垣である。 ・高さは左端で約2.8m、右端で約1.9mであり、天端が斜めになっている。全長は天端で約4.8mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石と切石を用いた谷積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形や、やや丸みのあるものが見られ、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは一連の石垣として描かれており、明治以降の開口に伴い築造された石垣である。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角部近傍の天端から下部に至る縦目地	左側	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石谷積	石材加工度と石積工法の違い
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

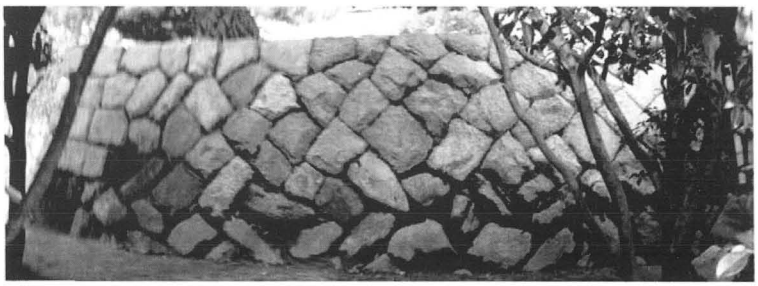
石垣番号	3062	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石、割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	谷積	
方　位	西				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	不明建物				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	23.37	23.6	1.8	1.7	1.73	75	77	74	73	76

築造時期	生駒期・新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



全て谷積（後世のもの）

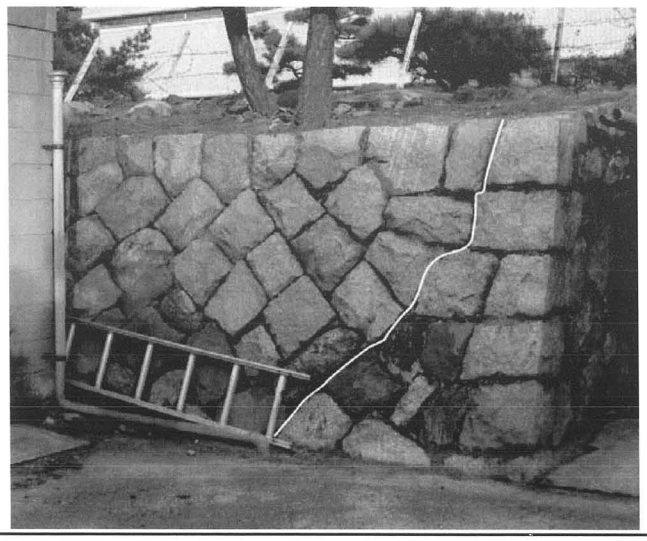
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

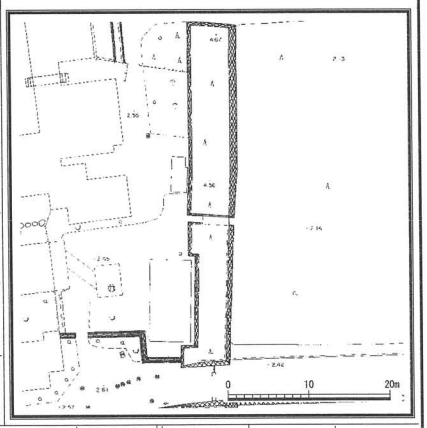
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の披雲閣東側の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.7m、全長は天端で約23.4mである。 ・勾配は74度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の切石を用いた谷積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・左隅角は完成度の低い算木積であるが、右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から存在した石垣とも考えられるが『高松城下図屏風』によると、石垣幅が狭く描かれており、新郭造築期に現位置に移動したとも考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは一連の石垣として描かれており、明治以降に積み直した際に開口され、分断されたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角部近傍の天端から	左側	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石谷積	石積工法の違い
下部に至る縦目地	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

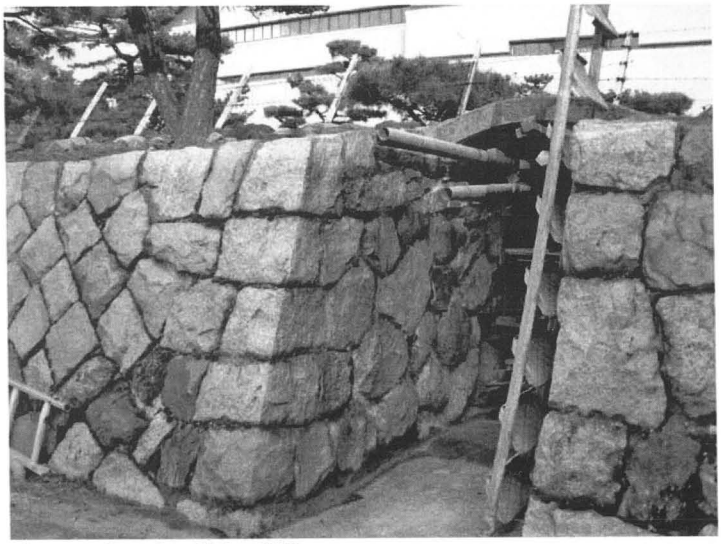
石垣番号	3063	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	門（後世のもの）				石積工法		谷積	
方　位	南				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.58	5.47	1.71	1.86	1.96	76	89	-1	90	78

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



全ての目地モルタル詰め、谷積

※後世の開口部

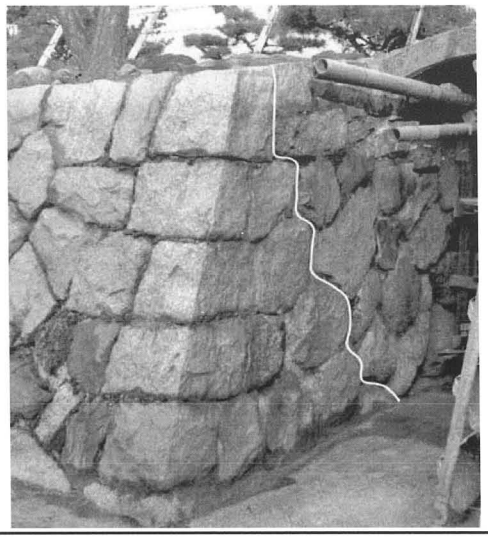
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の披雲閣東側に位置する開口部の南面石垣である。 ・高さは左端で約1.7m、右端で約2.0mであり、天端は斜めになっている。全長は天端で約4.6mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた谷積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは一連の石垣として描かれており、明治以降の開口に伴い築造された石垣である。

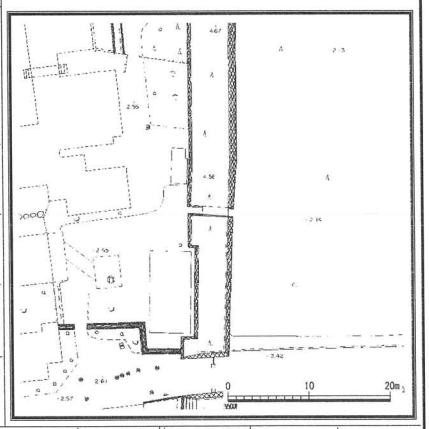
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角部近傍の天端から下部に至る縦目地	左側	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	石積工法の違い
	右側	花崗岩	方形割石		割石谷積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3064	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	門（後世のもの）				石積工法	谷積	
方　位	北				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

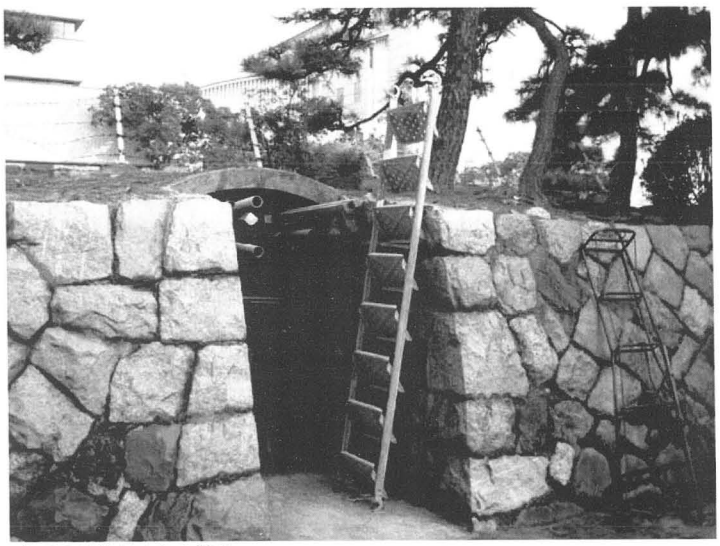


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.57	5.45	1.92	1.86	1.73	78	88	89	90	80

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



全ての目地モルタル詰め

※後世の開口部

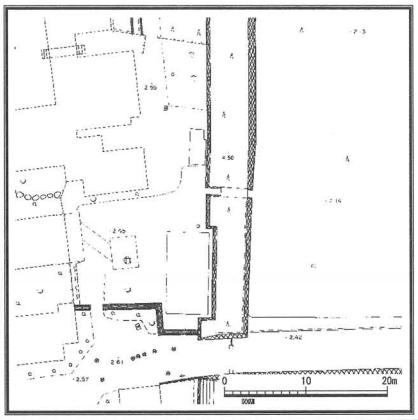
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の披雲閣東側に位置する開口部の北面石垣である。 ・高さは左端で約1.9m、右端で約1.7mであり、天端は斜めになっている。全長は天端で約4.6mである。 ・勾配は89度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた谷積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは一連の石垣として描かれており、明治以降の開口に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3065	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	谷積	
方　位	西				角石(算木) 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

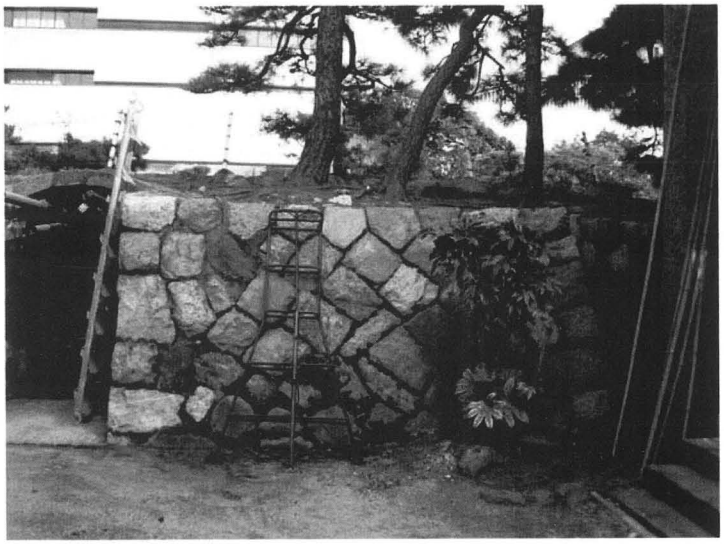


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.39	3.77	1.71	1.69	1.8	80	70	70	74	73

築造時期	生駒期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



大半が谷積、後世のもの

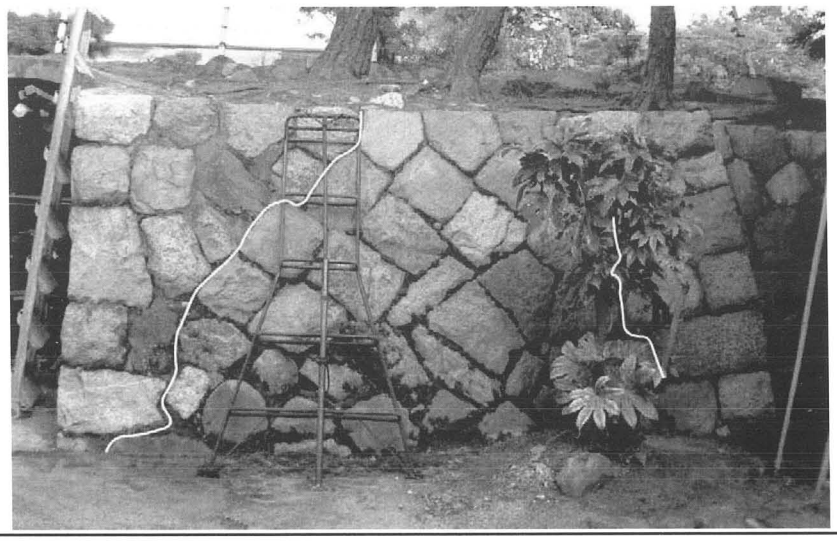
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の披雲閣東側の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.7m、全長は天端で約3.4mである。 ・勾配は70度と緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた谷積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っているが、一部扁平のものや小ぶりの石材が混在する。 ・左隅角は算木積になっていないが、左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から存在した石垣とも考えられるが『高松城下図屏風』によると、石垣幅が狭く描かれており、新郭造築期に現位置に移動したとも考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは一連の石垣として描かれており、明治以降に積み直した際に開口され、分断されたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅各下部から右上がりに天端に至る縦目地	左側	花崗岩	方形	ほぼ同規模	切石布積	左隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形		切石谷積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3066	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法		谷積	
方　位	南				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	0.79	0.86	1.84	-	1.82	73	78	-	76	75

築造時期	新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

切石布積、後世のもの

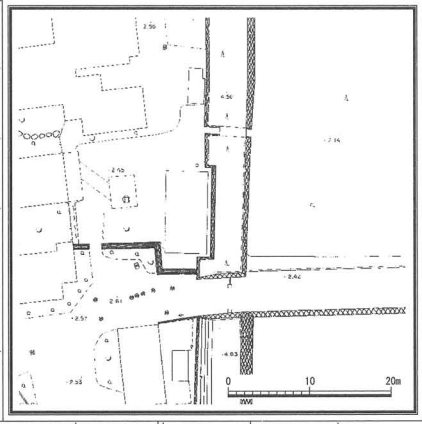
備　考	短い石垣のため中央高・中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の披雲閣東側の南面内石垣である。 ・高さは約1.8m、全長は天端で約0.8mである。 ・勾配は78度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』に描かれており、新郭造築期に築造されたと考えられる。 ・両隅角に接続する石垣が明治以降に積み直されていることから、本石垣も積み直されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3067	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	谷積	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	11.11	10.72	1.85	1.66	1.22	75	79	72	70	73

築造時期	生駒期・新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

切石谷積、後世のもの

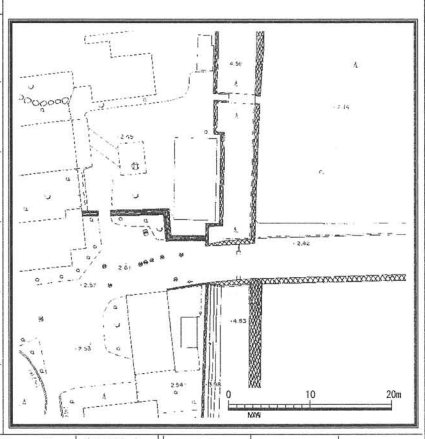
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の披雲閣東側の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.7m、全長は天端で約11.1mである。 ・勾配は72度と緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた谷積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から存在した石垣とも考えられるが『高松城下図屏風』によると、石垣幅が狭く描かれており、新郭造築期に現位置に移動したとも考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると折れを持ちながらも№3056～№3067石垣までは一連の石垣として描かれており、明治以降に積み直した際に開口され、分断されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3068	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法	谷積	
方　位	北				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.88	1.8	1.21	1.13	1.15	73	76	76	80	78

築造時期	生駒期・新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

切石谷積、後世のもの

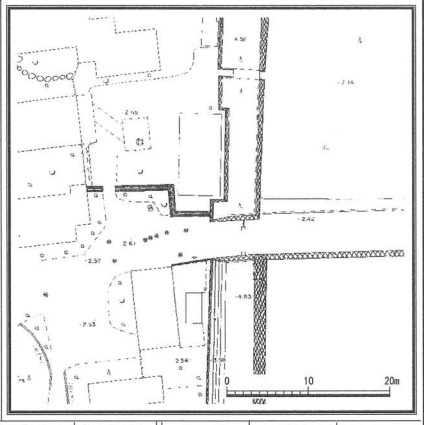
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の披雲閣東側の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.1m、全長は天端で約1.9mである。 ・勾配は76度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた谷積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』に描かれている石垣のいずれかに該当すると考えられるが、いずれにしても明治以降に改変、積み直しがあったと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3069	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	谷積	
方　位	西				角石(算木) 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



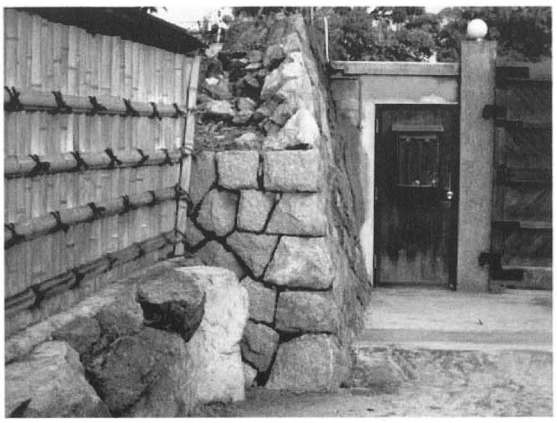
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.84	1.84	1.43	-	1.37	78	78	74	76	76

築造時期	生駒期・新郭造築期・明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

目地が少々ゆるむ



※切石の谷積、布積、後世のもの

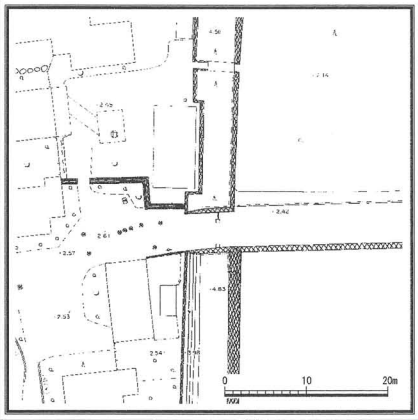
備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の披雲閣東側の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.4m、全長は天端で約1.8mである。 ・勾配は74度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた谷積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から存在した石垣と考えられるが、『高松城下図屏風』によると石垣幅が狭く描かれており、新郭造築期ないしは明治以降に現位置に移動したと考えられる。 ・谷積になっており、明治以降に全面積み直しが行われていると考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3070	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	門（後世のもの）				石積工法		谷積	
方　位	南				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.27	6.13	1.36	2.48	2.56	76	81	80	80	72

築造時期	江戸末期・明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

全て谷積

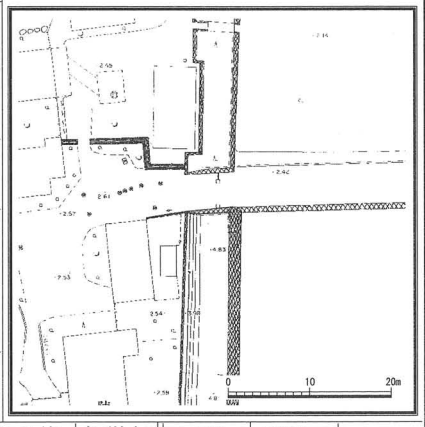
※後世の開口部（堀埋め立て後のもの）

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の披雲閣東側に位置する開口部の南面石垣である。 ・高さは左端で約1.4m、中央から右端にかけて約2.5～2.6mである。全長は天端で約5.3mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた谷積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には見られない開口部であるが、『旧高松御城全図』によると中堀に橋のような施設が描かれており、江戸末期には開口していた可能性も考えられる。 ・谷積になっており、明治以降に築造された可能性が高いと考える。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3071	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	門（後世のもの）				石積工法	谷積	
方　位	北				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無				刻　印	無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好	n1										a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.34	6.17	2.48	2.34	1.43	70	75	80	80	－

築造時期	江戸末期・明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

欠損

※全て谷積、後世の開口部（堀埋め立て後のもの）

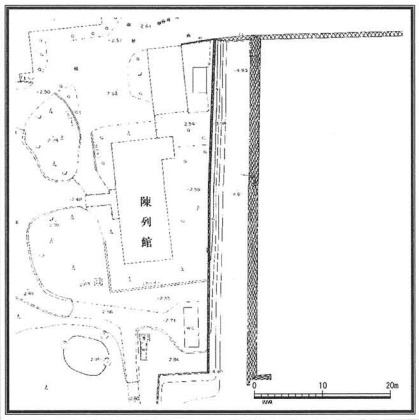
備　考	右角勾配計測不可	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の披雲閣東側に位置する開口部の北面石垣である。 ・高さは左端から中央にかけて約2.3～2.5m、右端で約1.4mである。全長は天端で約5.3mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた谷積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には見られない開口部であるが、『旧高松御城全図』によると中堀に橋のような施設が描かれており、江戸末期には開口していた可能性も考えられる。 ・谷積になっており、明治以降に築造された可能性が高いと考える。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3072	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	外(多聞塀台)				石積工法	乱積、谷積(一部)	
方　位	西				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

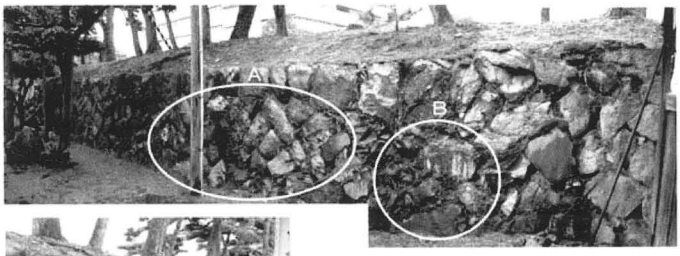


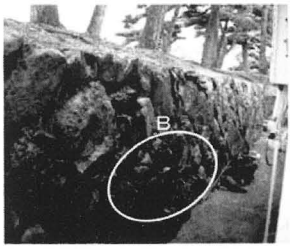
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好		n1									a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	49.38	49.47	1.45	1.55	1.26	-	89	80	80	78

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

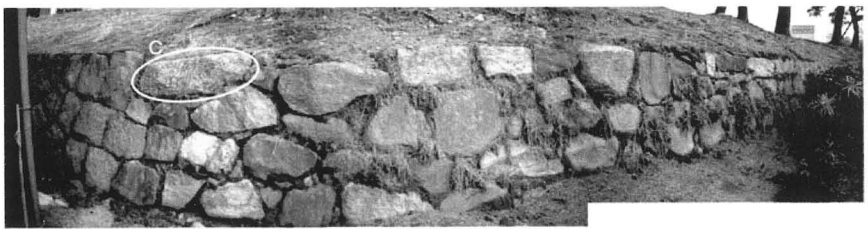
破損現状





A．谷積
B．野面積
C．天端石が押し出される

※野面積、谷積、乱積が混在する



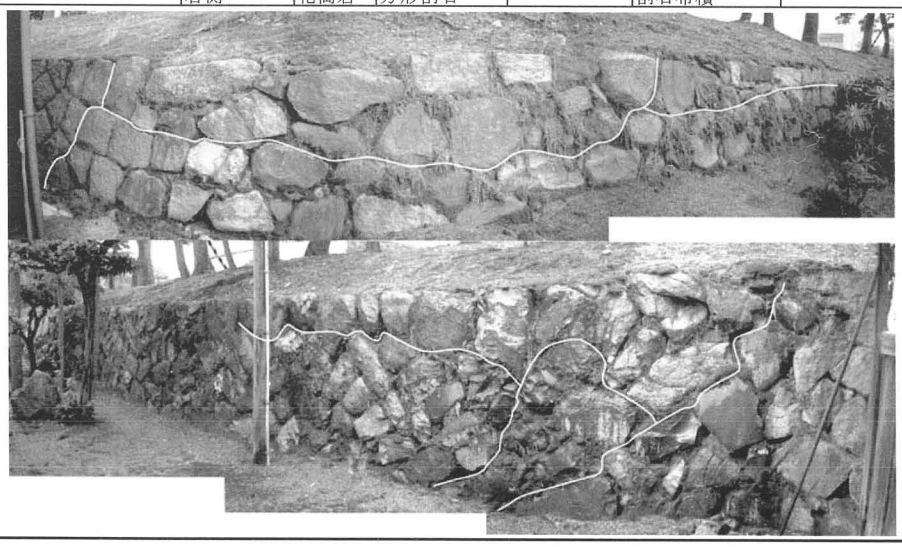
備　考	左角勾配計測不可	調査年月日	平成16年11月 8日

石垣項目別カルテ

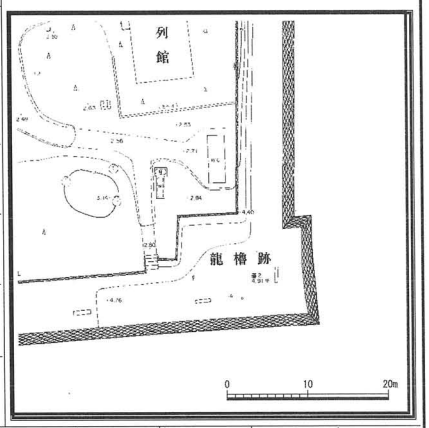
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南東部の東面内石垣で、陳列館の東側に位置する。 ・高さは中央部で約1.6m、全長は天端で約49.4mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積であるが、割石による乱積や切石による谷積、布積も見られる。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形、丸みのあるもの、やや扁平のもの等不揃いであり、規模も大小混在する。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・天端石にズレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、3ヶ所に雁木が描かれており、明治以降に積み直されたと考えられる。 ・積み方、工法等様々で数回の積み直しが考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
天端石の下部の横目地	上方	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石布積	石積工法の違い
	下方	花崗岩	方形割石		割石谷積	
右隅角部近傍天端から下部に至る左下がりの目地	左側	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石谷積	左側石垣の積み直し
	右側	花崗岩	方形割石		割石谷積	
石垣中央部笠石下の目地	上方	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石布積	笠石の積み上げ
	下方	花崗岩	方形割石		割石布積	
石垣中央部の横目地	上方	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石乱積	上方石垣の積み直し
	下方	花崗岩	方形割石		割石布積	
石垣中央部の縦目地	左側	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石谷積	石積工法の違い
	右側	花崗岩	方形割石		割石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

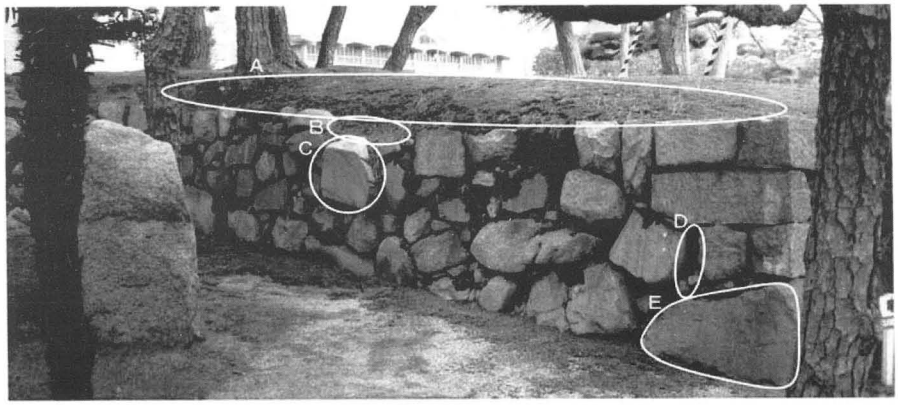
石垣番号	3073	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法	乱積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	野面	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	龍櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1	n1									a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	7.48	7.44	1.22	1.28	1.45	78	84	87	83	80

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．盛土厚く多い
B．一石ヌケ
C．ズレ出し
D．間詰石のヌケ
E．野面石

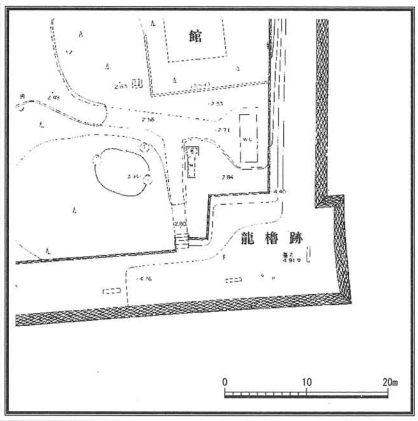
備　考		調査年月日	平成16年11月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の龍櫓台の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.3m、全長は天端で約7.5mである。 ・勾配は87度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形で、丸みのあるもの等形状が不揃いであり、規模も大小混在する。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・天端石にズレが見られる。
石垣の変遷	・右隅角最下段のみ野面石で、それより上段は切石を用いており、隅角付近の積み直しが考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3074	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	櫓台				石積工法	乱積	
方　位	西				角石(算木) 左	切石、野面	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	龍櫓				石材	花崗岩、安山岩、凝灰岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	

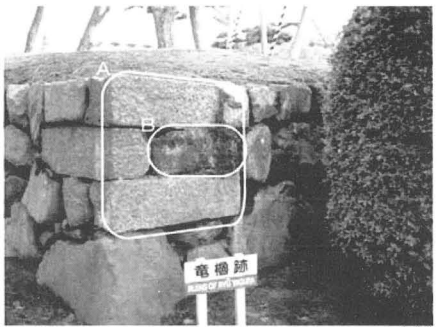


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s3	s2									a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.41	5.47	1.45	1.32	1.16	80	79	79	74	76

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．積み替えの可能性あり、中央部一石飛び出し、その下ヌケ
B．凝灰岩、転用石の可能性あり、溝の様な跡あり

備　考		調査年月日	平成16年11月 8日

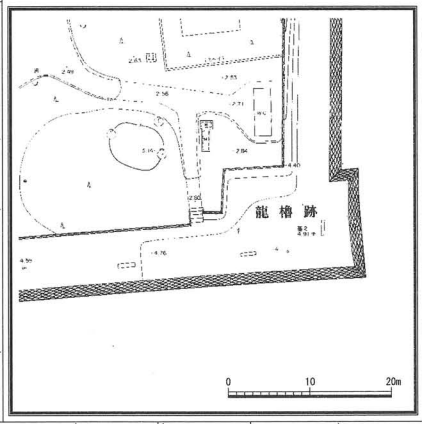
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の龍櫓の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.3m、全長は天端で約5.4mである。 ・勾配は79度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は丸みのあるものの他、方形、扁平などの形状のものが混在する。規模も大小混在する。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石垣下部に石材の欠損が見られる。また、中段部にズレが見られる。
石垣の変遷	・左隅角の上部3石は他の築石と形状、加工度が異なり、また下部の隅角石ともかみ合っておらず、積み直されていると考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3075	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法	乱積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	安山岩、花崗岩	
転用石	無			刻　印		○	

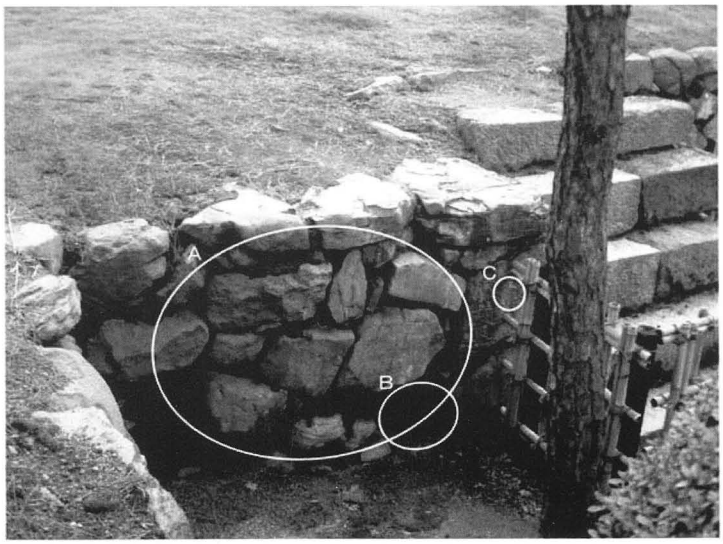


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s3			a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.34	2.33	1.14	-	1.17	76	89	83	87	90

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．雑な積み方
B．間詰石のヌケ
C．刻印○

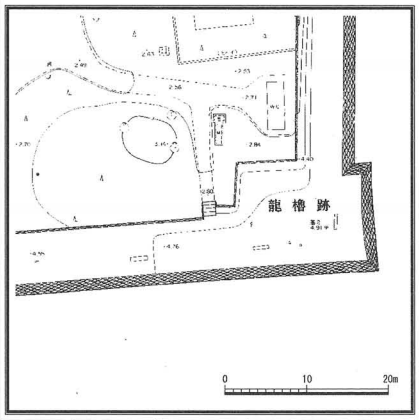
備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年11月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の龍櫓の西面に取り付く北面内石垣である。 ・高さは右端で約1.2m、全長は天端で約2.3mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は安山岩、花崗岩の割石を用いた乱積である。やや乱雑な積み方である。両隅角とも入隅であるが、右隅角は本来は出隅であったと考えられる。 ・石材は角張ったものや、やや扁平のものが混在する。規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・右隅角は算木積になっていない。 ・転用石は見られない。 ・刻印は、右隅角3石目に○が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』には描かれていないが、『旧高松御城全図』に見られることから、松平初期ないしは新郭造築期のものと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3076	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	石段				石積工法			
方　位	北				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右		
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

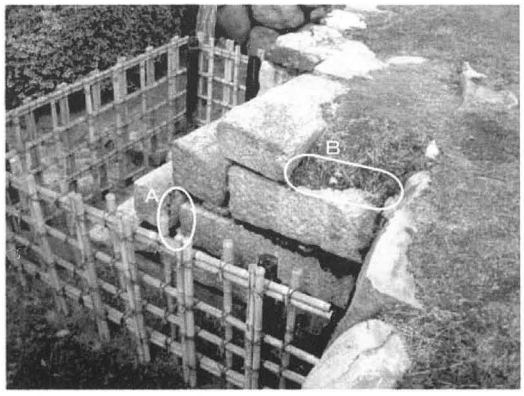


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1	s1									a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	-	2.49	1.42	-	-	-	-	-	-	89

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．前へズレ出し隙間があく
B．欠損

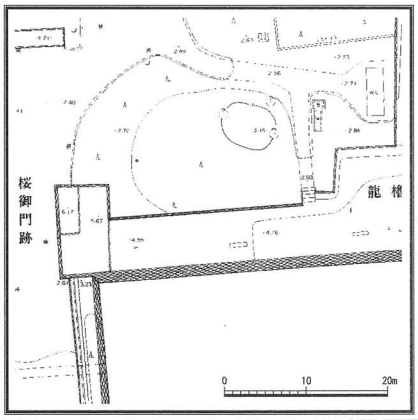
備　考	雁木５段、右角勾配左側面計測	調査年月日	平成16年11月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の龍櫓に南向きに上る石段である。 ・段数は5段で、最上段の幅員は約2.5mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた石段である。側面は布積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・上段で1石欠損が見られる。 ・中段の石段にズレが見られる。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降のものと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3077	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法	乱積、谷積(一部)	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1		s2								a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	(1.96) 25.66	23.5	1.41	1.64	1.56	79	80	77	82	78

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．欠落
B．天端石が浮く
C．ハラミ
D．落下
E．欠け
※右端谷積

備　考	天端25.66m内1.96m埋まる	調査年月日	平成16年11月 8日

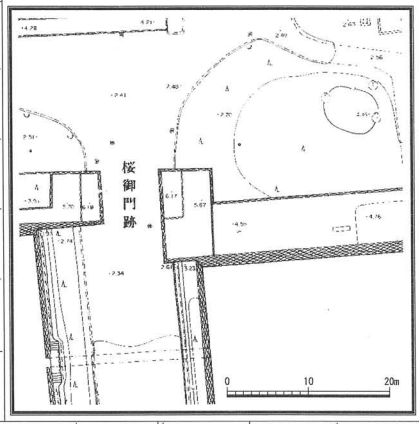
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の桜御門と龍櫓をつなぐ多聞櫓の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.6m、全長は天端で約25.7mである。 ・勾配は77度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積であるが、一部谷積も見られる。右隅角近くは谷積である。両隅角とも入隅である。 ・石材はやや丸みのあるもが多く見られ、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中段に薄いハラミが見られる。 ・天端石の欠損が見られる。
石垣の変遷	・谷積部分を中心に、積み直しがあったと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣中央部の天端から下部に至る谷形目地	谷形中側	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石乱積	谷形部の積み直し
	谷形外側	花崗岩	方形丸み		野面石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

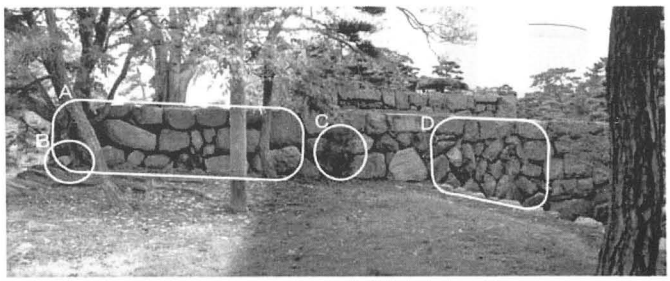
石垣番号	3078	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石、切石、野面	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法		布積、谷積	
方　位	東				角石(算木)	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	10.62	6.3/4.23	0.93	1.15/2.58	2.82	72	84	86	87	85

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．野面積
B．ハゼの木の根が入り込む
　風による影響を受ける可能性あり
　現在は影響少ない
C．マツの根
D．谷積

右端布積、その横は谷積。
後世の積み直しと思われる。
右端最下段は飛び出す。

備　考		調査年月日	平成16年11月 8日

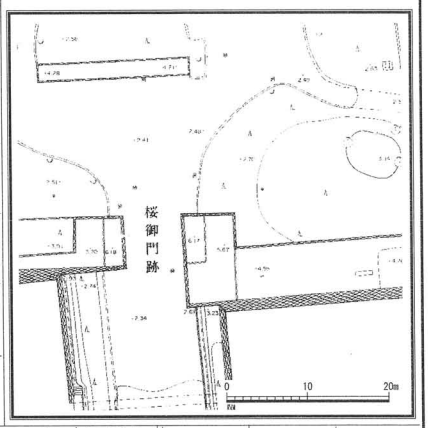
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の桜御門台の東側を取り巻く東面内石垣である。 ・高さは左端で約0.9m、右端で約2.8mである。全長は約10.6mである。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石や割石を用いた乱積である。左半では、谷積や布積も見られ、やや乱雑な積み方である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は角張ったものや、やや扁平のものが混在する。規模も大小混在する。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・左隅角付近はハゼの木の根が石垣中に入り込んでいるが、変形までは至っていない。 ・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・右隅角下段の石が東へ飛び出しており、積み直しがあったと考えられる。『旧高松御城全図』には、本石垣の東側にもう1つ石垣状の構造物が描かれており、明治以降に撤去した際に積み直しがあった可能性が考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角下部から左上がりに天端に至る目地	左側	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石谷積	右隅角部の積み直し
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

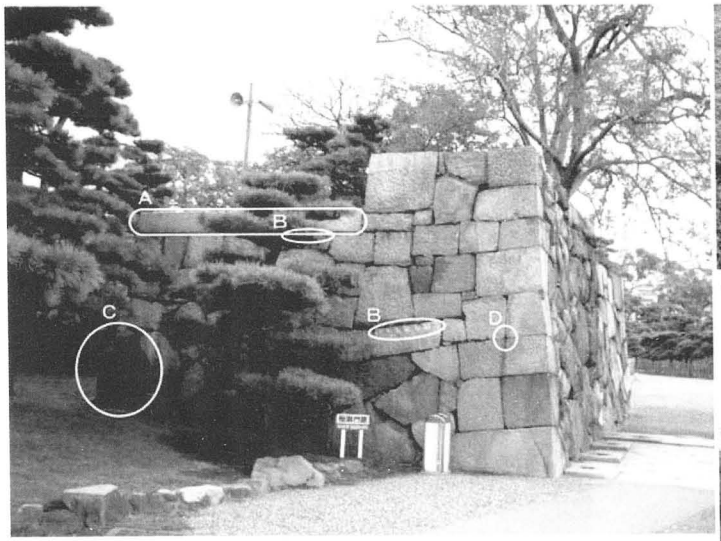
石垣番号	3079	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石、切石	石垣位置
石垣部位	門(多聞櫓台)				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓、桜御門				石材		花崗岩	
転用石	無				刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好										有	a3	b1	D

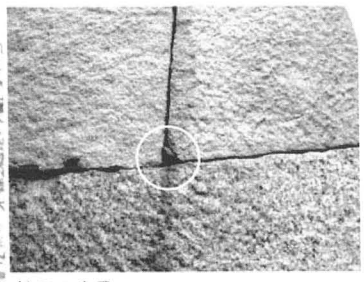
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.68/2.23	7.0 (0.82)	2.95	2.99/3.8 /3.05	3.91	85	86	86	85	80

築造時期	生駒期・新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

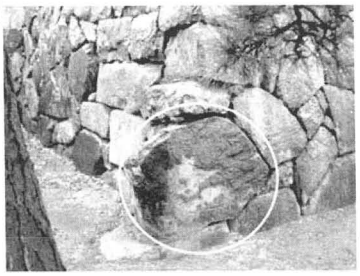


A．縁石
B．矢穴
C．角から出るように積んでいる
D．金具輪
※Cが飛び出ることから規模を縮小したものか？



輪形の金具

一石のみ飛び出る



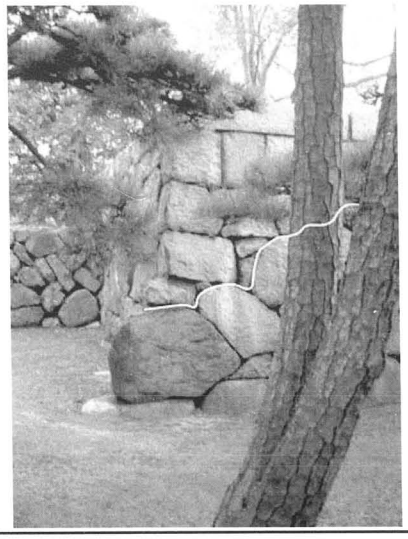
備　考		調査年月日	平成16年11月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜御門東側台の北面内石垣である。 ・高さは左半で約3.0m、右半は約3.8～3.9mである。全長は天端で約5.9mであるが、下段部分の石材が東へ延びており、本来はもっと長い石垣であったと考えられる。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積であるが、上部は切石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。石垣のほぼ全面にノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形の形状が揃ったものが多く見られるが、一部丸みのある野面石が見られる。規模は大ぶりのもので揃っている。 ・右隅角は完成度が高い算木積であるが、左隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・左隅角下段の石材が東へ延びており、左隅角付近の改変が考えられる。『旧高松御城全図』によると東側に石垣状のものが続くように描かれており、明治以降に撤去された可能性が考えられる。

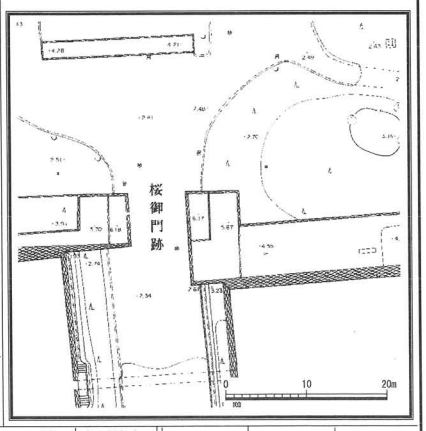
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から右上がりに天端までに至る目地	上方	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	左隅角部の積み直し
	下方	花崗岩	方形割石		割石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3080	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法	乱積	
方　位	東				角石（算木） 左	野面石、切石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	桜御門				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.69	5.81	0.63	0.52	0.78	85	89	90	90	85

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修	基底部
修　理		文献資料	
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状

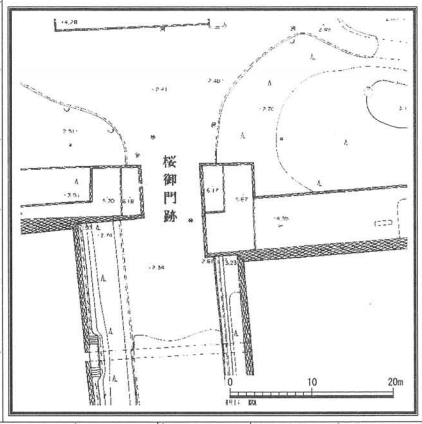
A．矢穴
B．ノミ跡

備　考		調査年月日	平成16年11月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜御門東側台の東面石垣である。 ・高さは中央部で約0.5m、全長は天端で約5.7mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模も標準的なものでほぼ揃っている。 ・左隅角は完成度の低い算木積となっており、右隅角は1石のみの積み上げとなっている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』には描かれていないため、松平初期ないしは新郭造築期の披雲閣建設に伴い、築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3081	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法	布積	
方　位	南				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	切石、野面石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	桜御門				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
									s2			a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.19	2.24	0.73	0.64	0.65	78	88	88	86	85

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

間詰石のヌケ

備　考		調査年月日	平成16年11月 8日

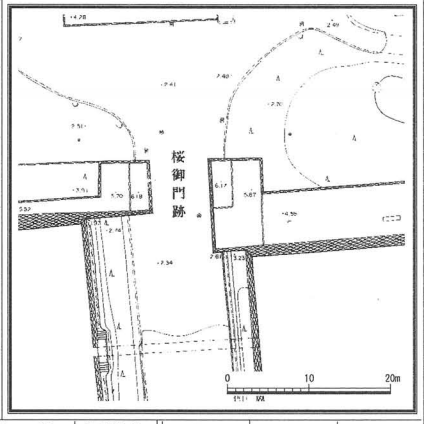
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜御門東側台の南面石垣である。 ・高さは中央で約0.6m、全長は天端で約2.2mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模も標準的なものでほぼ揃っている。 ・左隅角は算木積になっていないが、右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』には描かれていないため、松平初期ないしは新郭造築期の披雲閣建設に伴い、築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3082	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		野面、割石
石垣部位	門				石積工法		乱積
方　位	西				角石(算木)	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	多聞櫓、桜御門				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

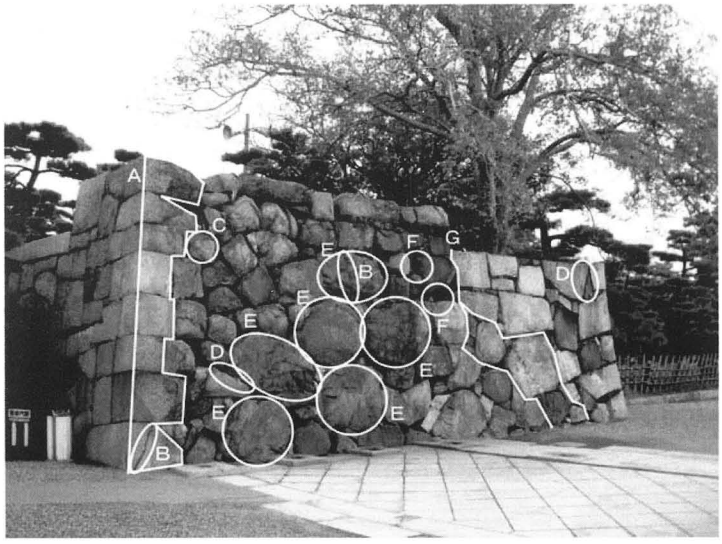


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s1		n5				s2	r123		a2	b1	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.82/5.1	11.61	3.88	3.92/3.91/3.2	3.35/3.25	80	80	83	82	79

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A. ノミ
B. ワレ
C. 飛び出し
D. 矢穴
E. 大きめの石
F. 間詰石ヌケ
G. 縦目地

※門部分を中心に焼損

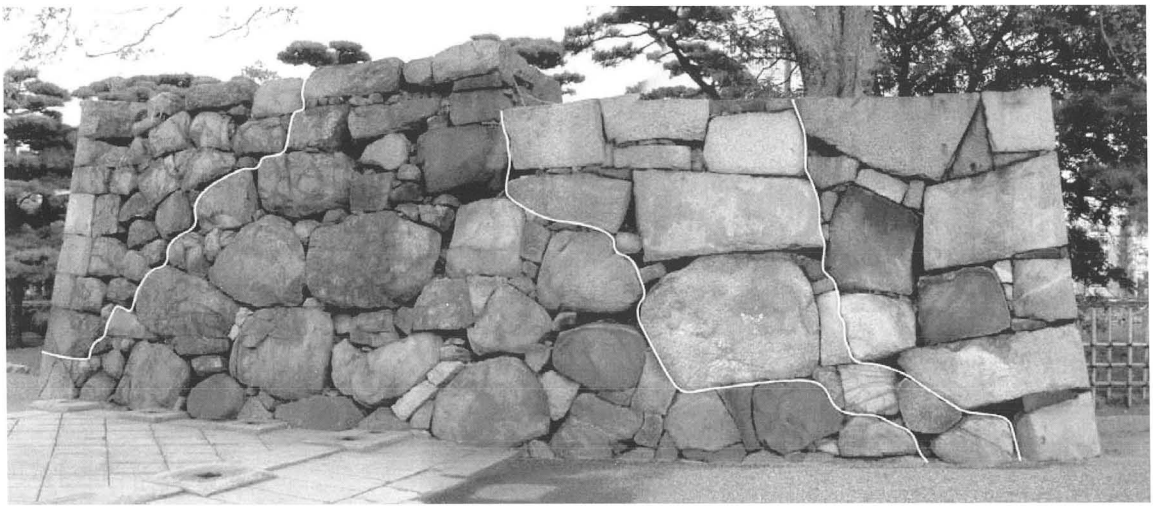
備　考		調査年月日	平成16年11月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜御門の西面石垣であり、見学動線に沿って位置する。 ・高さは門部分中央部で約3.9m、多聞櫓台中央部で約3.2mで、全長は天端で約6.5mである。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は中央部は花崗岩の野面石を用いた乱積であるが、右半は割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。また隅角石はノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形で、規模は比較的大ぶりなもので揃っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積みである。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・戦災による桜御門焼失に伴う焼損が石垣全面に見られ、石材のヒビも多く劣化が著しい。
石垣の変遷	・生駒期から所在した可能性が考えられる。 ・石材の加工状況や積み方に違いが見られ、積み直しがあったと考えられる。

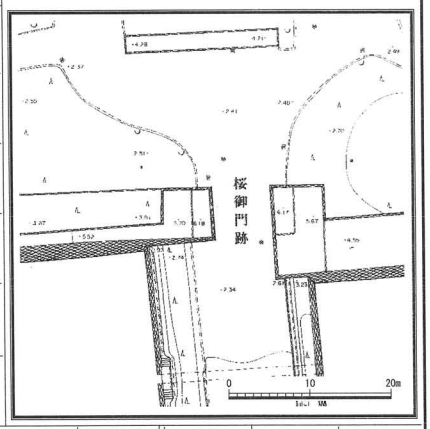
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から右上がりに天端まで至る目地	左側	花崗岩	方形割石	左側石材はかなり小	割石乱積	左隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
天端中央から右下がりに右隅角下部に至る目地	左側	花崗岩	方形丸み	左側石材はやや小ぶり	野面石乱積	右側石垣の積み直し
	右側	花崗岩	方形割石		割石乱積	
右隅角下部から左上がりに天端へ至る目地	左側	花崗岩	方形割石	右側石材はやや小ぶり	割石乱積	右隅角部の積み直しか築造時のもの
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3083	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	門				石積工法	布積	
方　位	東				角石（算木） 左	割石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	桜御門				石材	花崗岩	
転用石	無				刻　印	無	

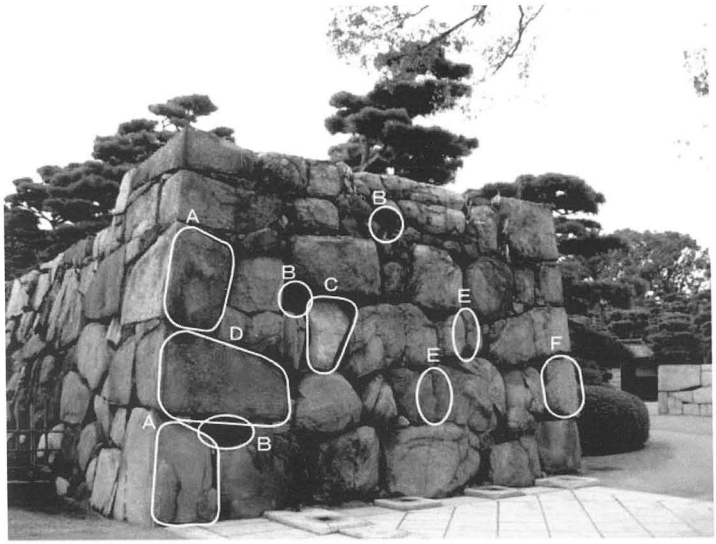


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
					n5					r123		a2	b1	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.82	6.51	3.98	3.89	3.94	83	86	86	86	84

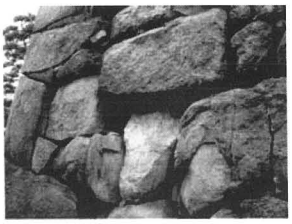
築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

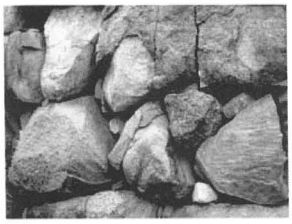
破損現状



A．縦石使い
B．ヌケ
C．ワレ落ち
D．ハツリ仕上げ
E．ワレ
F．ノミ跡

※門部分を中心に焼損





備　考		調査年月日	平成16年11月 8日

石垣項目別カルテ

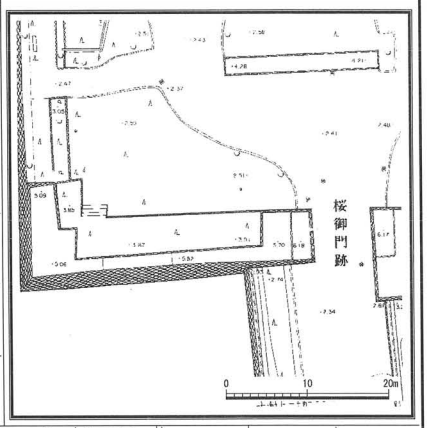
位置・規模等	・本石垣は桜御門の東面石垣であり、見学動線に沿って位置する。 ・高さは中央部で約3.9m、全長は天端で約6.5mである。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた布積である。両隅角とも上部は切石、下部は割石を用いて積み上げられている。また、両隅角ともノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形で、規模は比較的大ぶりなもので揃っている。 ・両隅角は完成度の高い算木積によって積み上げられているが、左隅角基礎部と３石目は縦石使いとなっている。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・ワレ落ちのある石材が数石見られる他、間詰石のヌケが中央上部に見られる。 ・戦災による桜御門焼失に伴う焼損が石垣全面に見られ、石材のヒビも多く、劣化が著しい。
石垣の変遷	・生駒期から所在した可能性が考えられる。 ・隅角部石材の加工状況が上下で異なることから積み直しがあった可能性が考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
天端中央から右隅角中段に至る目地	上方	花崗岩	方形割石	上方石材はかなり小ぶり	割石布積	上方の積み直しか使用石材の違い
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3084	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法	布積	
方　位	北				角石(算木) 左	切石、割石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓、桜御門				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印	無		

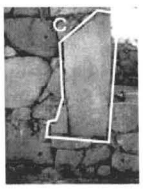


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s23			a3	b1	D

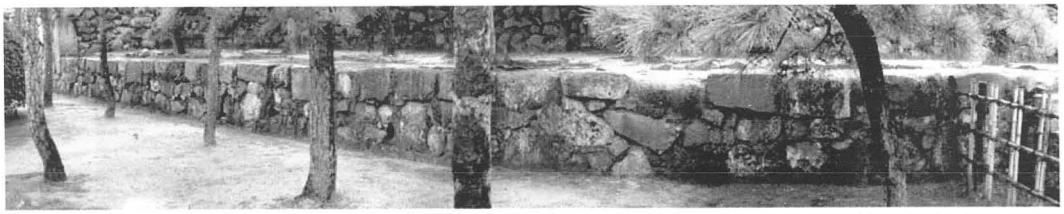
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.25/3.5/19.24	25.06	3.92/1.18/1.18	3.82/3.29/1.04	3.23/1.12	84	83	82	82	83

築造時期	生駒期・新郭造築期	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状



A．間詰石のヌケ
B．矢穴
C．細工切石、石材の縦使い



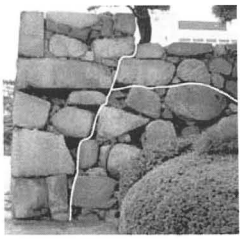
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

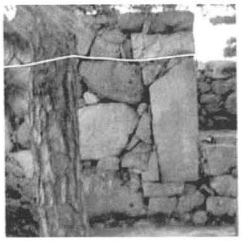
石垣項目別カルテ

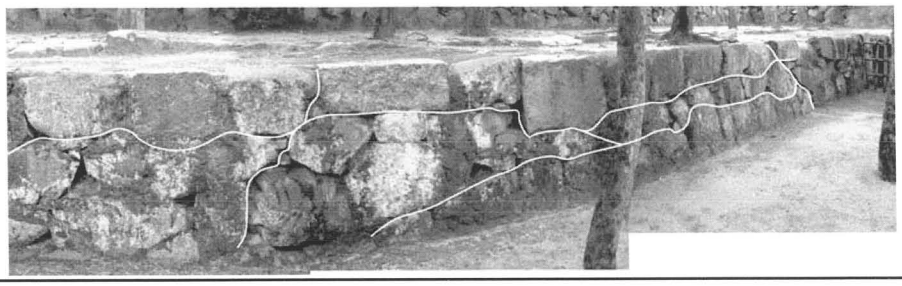
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南端の北面内石垣である。左隅角で桜御門西側台の北面を構成する。 ・高さは桜御門台部分は約3.8m、多聞櫓台部分は約3.3m、その他の部分は約1.0mである。全長は天端で約25.0mである。 ・勾配は82度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた布積である。左隅角は上部は切石、下部は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・桜御門台の右隅角に縦石使いの石材が見られる。 ・石材は方形のものが多いが、やや丸みのあるものや、やや扁平のものなども見られる。規模は40～50cm程度の標準的なものが多いが、左隅角近傍に見られる大石材や、やや小ぶりのものなども見られる。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・左隅角の一部にノミ仕上げが見られる。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケがある程度で、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・隅角部石材の加工状況が上下で異なることから積み直しがあった可能性が考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
天端石の2石下の横目地	上方	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石布積	上方石垣の積み直しか築造時のもの
	下方	花崗岩	方形割石		割石乱積	
右側全面に渡る横目地	全面	花崗岩	方形割石	大小石材混在	割石布積	布積
左隅角下部から右上がりに天端に至る目地	左側	花崗岩	方形割石	大小石材混在	割石布積	積み直し
	右側	花崗岩	方形割石		割石布積	

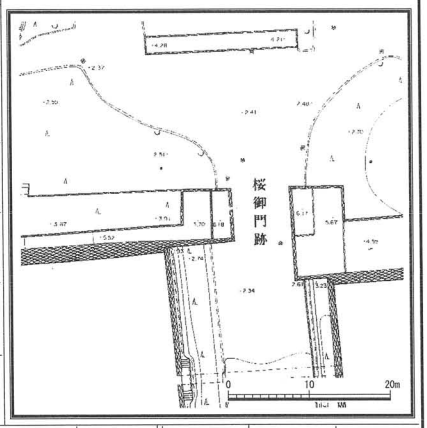






史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3085	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法	乱積	
方　位	西				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	桜御門				石材	花崗岩、凝灰岩	
転用石	無			刻　印	無		



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			n1									a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.7	5.87	0.66	0.53	0.66	79	-3	88	84	78

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．乱積
B．凝灰岩
C．ズレ出し
※石材不揃い

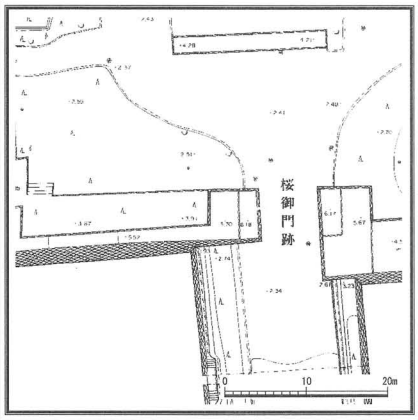
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜御門西側台の西面石垣である。 ・高さは中央部で約0.5m、全長は天端で約5.7mである。 ・勾配は88度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積であり、天端石には凝灰岩も含まれる。両隅角とも切石を1石のみ積んでいる。 ・石材はやや丸みのあるものや扁平なもの、方形のもの等様々で、規模も大小混在している。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・全体的に石材のズレが見られる。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』には描かれていないため、松平初期ないしは新郭造築期の披雲閣建設に伴い、築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3086	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法	乱積	
方　位	西				角石(算木) 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

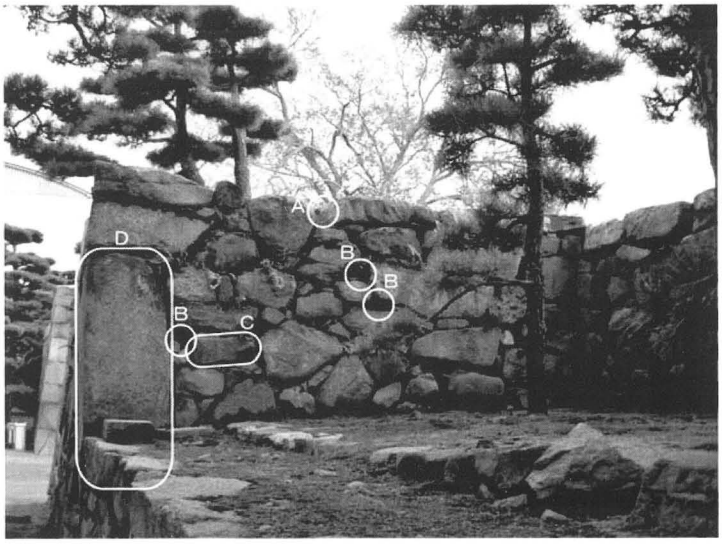


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1	s2						s2			a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.26	4.09	2	1.77	1.69	89	89	90	89	86

築造時期	生駒期・新郭造築期・明治以降	改修	基底部
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



A．欠け
B．間詰石のヌケ
C．ズレ出し
D．石材の縦使い

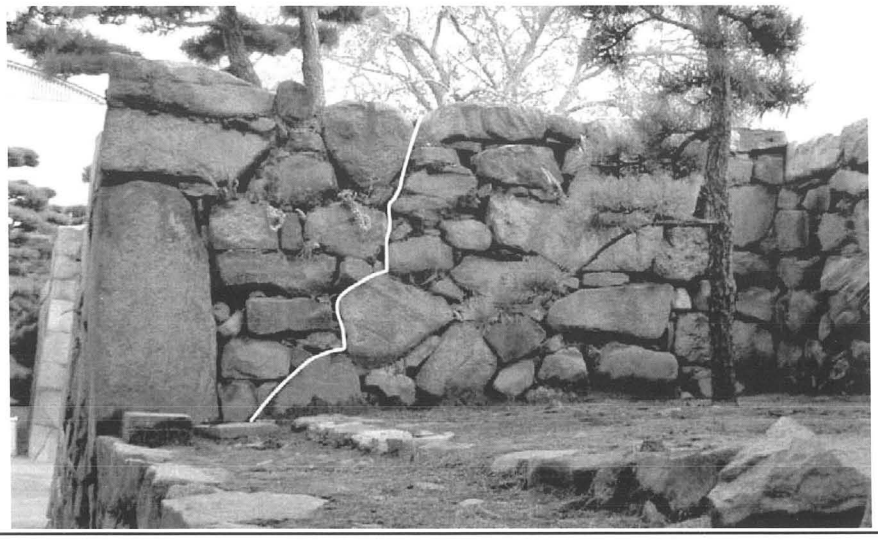
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜御門西側台の西面石垣である。 ・高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約4.3mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。左隅角は大石材3石によって積み上げているが、基礎となる石材は縦石使いとしている。右隅角は入隅である。 ・石材は不定形のものが多く、規模も大小の石材が混在する。 ・左隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・天端石の欠損が見られる。また、中段に石材のズレが見られる。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』に描かれているが、全長は絵図より長い。右半は明治以降に№3087石垣の積み直しに伴い、つけ加えられた可能性が考えられる。

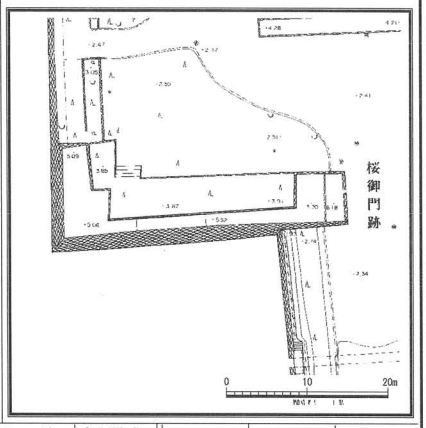
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から右上がりに天端に至る目地	左側	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石乱積	右半積み直し
	右側	花崗岩	方形割石		割石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3087	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	内（多聞櫓台）				石積工法	乱積、谷積（一部）	
方　位	北				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	



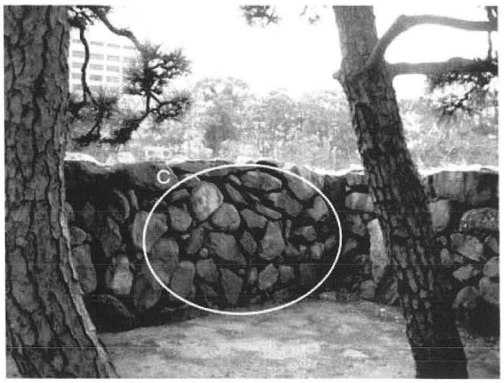
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2n1						s1			a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	23.23	23.09	1.62	1.57	1.09	86	86	84	86	82

築造時期	松平初期・新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．間詰石のヌケ
B．小さいズレ出し
C．比較的小石材の乱積



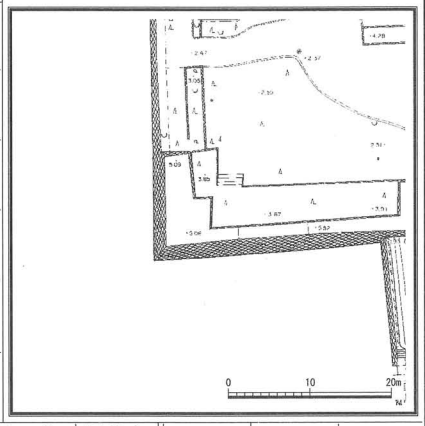
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の多聞櫓台の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.6m、全長は天端で約23.2mである。 ・勾配は84度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積であるが、右隅角近くでは谷積も見られる。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形で角の取れたやや丸みのあるものが多いが、扁平なものも天端石等に見られる。規模は標準的なものが多いが、比較的大ぶりのものも見られる。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石垣中段や上段にズレが見られる。また、間詰石のヌケも所々見られる。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』には描かれていないため、松平初期ないしは新郭造築期の披雲閣建設に伴い、築造されたと考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると、当初はもう少し北に位置していたと考えられる。当初の石垣位置と考えられる部分にはNo.3089石垣から断続的に続く石列があり、明治以降に積み直された可能性が高い。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3088	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内（多聞櫓台）				石積工法	乱積、谷積	
方　位	東				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

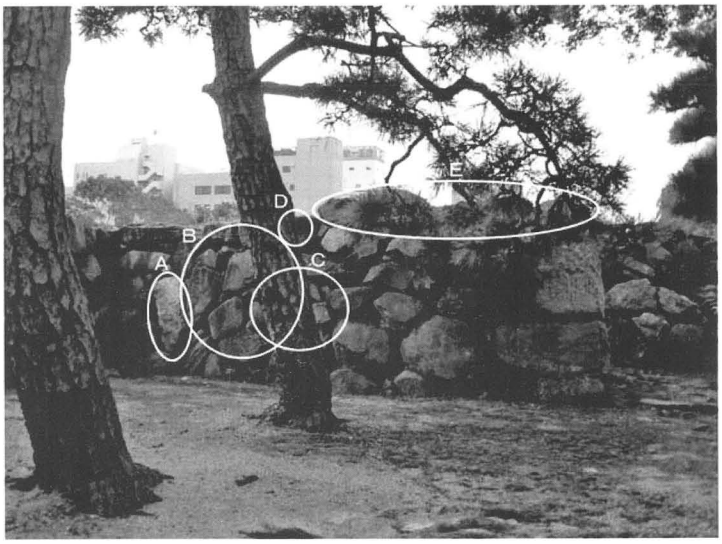


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
					s1							a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.85	3.92	1.1	1.25	1.38	82	86	80	82	77

築造時期	明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．縦石使い
B．谷積
C．小石材多い
D．ワレ
E．天端石不揃い

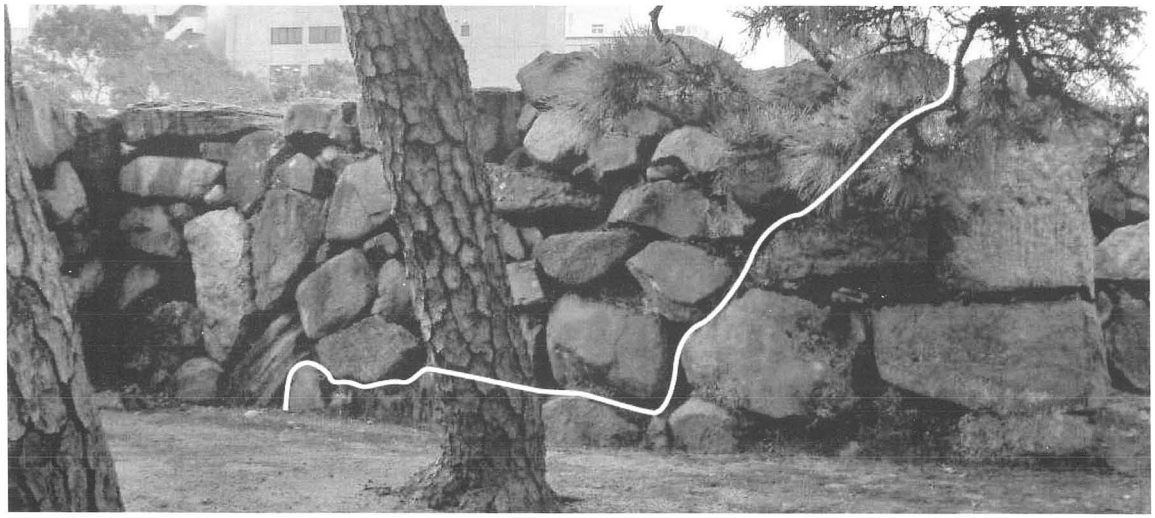
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南東部の東面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.3m、全長は天端で約3.9mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。右隅角は割石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。また、左隅角近くでは、大石の縦石使いを含めた谷積状の積み方も見られる他、天端も不揃いである。 ・石材は方形で角張ったものが多いが、やや扁平なものも見られる。規模は標準的なものが多いが、比較的大ぶりのものも多く見られる。 ・右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・天端石にワレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降に築造されたと考えられる。

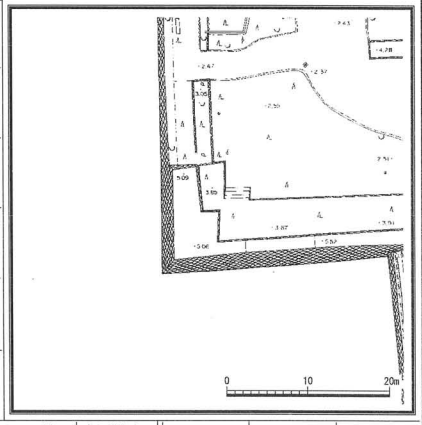
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角上部から左下がりに根石部に至る目地	左側	花崗岩	割石不定形	左側石材は小ぶり	割石乱積	左築石部の積み直しか築造時のもの
	右側	花崗岩	方形割石		割石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3089	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石、野面石	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法	乱積	
方　位	北				角石(算木) 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	安山岩、花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2			a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.13	2.03	1.34	-	1.23	77	78	84	81	68

築造時期	生駒期・松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

間詰石のヌケ
※天端石不揃い

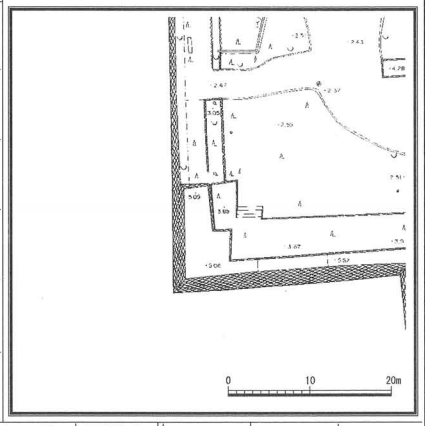
備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南東部の多聞櫓台の北面内石垣である。 ・高さは約1.3m、全長は天端で約1.1mである。 ・勾配は84度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。左隅角は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。また、天端も不揃いである。 ・石材は方形で角張ったものが多く、規模は標準的なものが多いが、小ぶりのものも見られる。 ・左隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、石垣は東へ長く延びており、明治以降に大きく改変されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3090	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石、野面	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		安山岩、花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2			a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.92	5.69	1.2	1.33	1.41	68	73	73	75	76

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

間詰石のヌケ
※やや乱雑な積み方

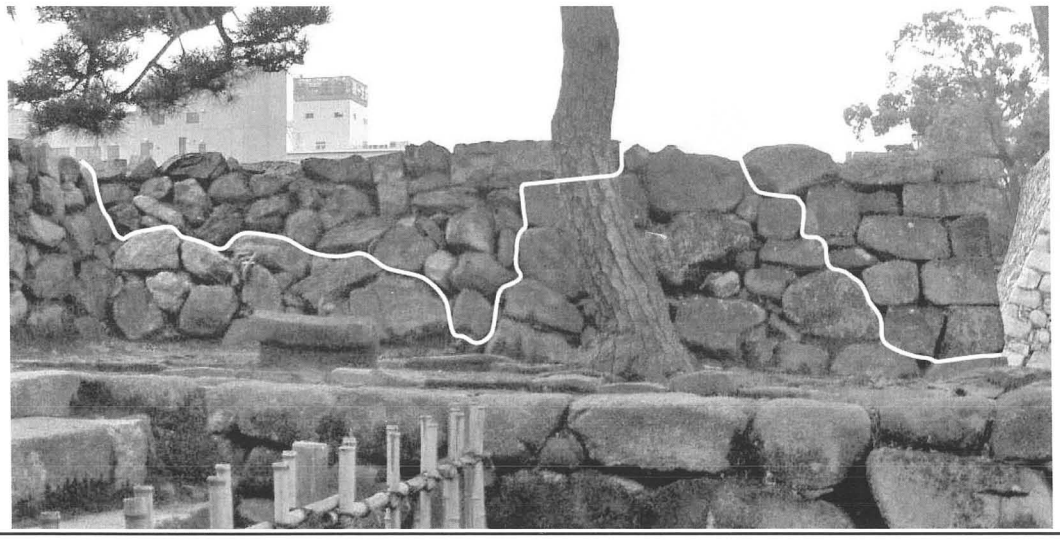
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南東部の多聞櫓台の東面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.3m、全長は天端で約5.9mである。 ・勾配は73度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石と野面石を用いた乱積である、右隅角近くでは布積である。右隅角は、切石によって積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形で角が取れた丸みのあるものや、やや扁平のものが見られる。規模は標準的なものが多いが、左隅角近くでは小ぶりのものが多く見られ、左右で積み方が異なる。 ・右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』には描かれておらず、『旧高松御城全図』に描かれており、松平初期ないしは新郭造築期のものと考えられる。 ・中央の縦目地より左側は右側に比べ乱雑な積み方であり、明治以降に積み直されたと考えられる。

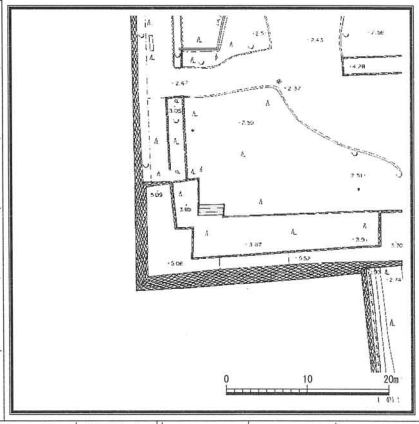
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角下部から天端に至る左上がりの目地	左側	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石乱積	隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形切石		割石乱積	
左隅角部から中央部までの谷形の目地	上方	花崗岩	不定形割石	下方は上方よりやや大ぶり	割石乱積	上方積み直し
	下方	花崗岩	不定形割石		割石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3091	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	雁木				石積工法		
方　位	北				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

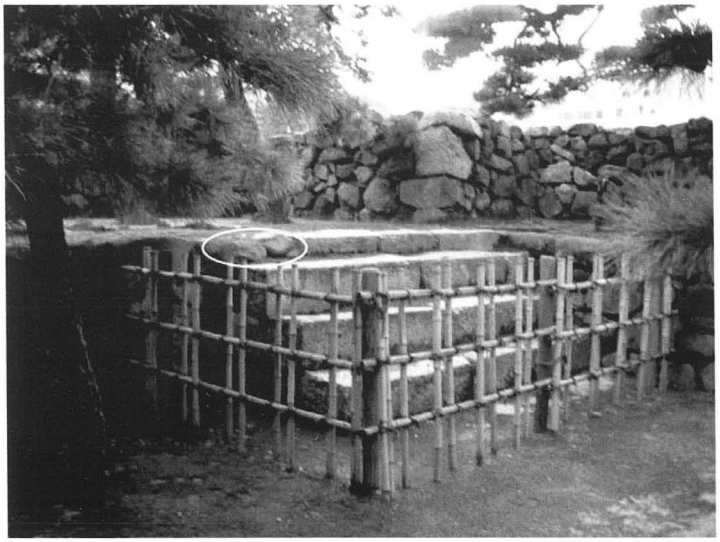


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	－	3.19	－	1.1	－	－	－	85	－	－

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



２石のみ自然石（後に補修したものか？）

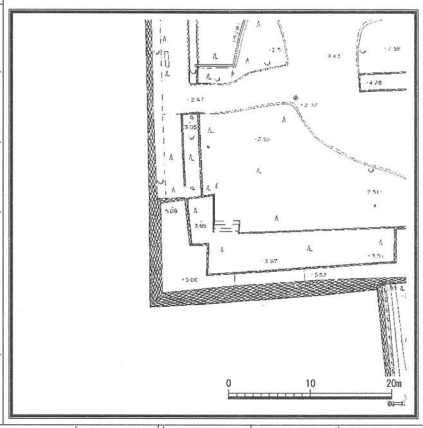
備　考	雁木５段	調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南東部の多聞櫓台の腰巻土塁へ取りつく雁木である。 ・段数は5段で、最上段の幅員は約3.2mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた石段である。側面は布積である。最上段に一部補足石が見られる。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』には描かれておらず、『旧高松御城全図』に描かれており、松平初期ないしは新郭造築期のものと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3092	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内				石積工法	布積	
方　位	東				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

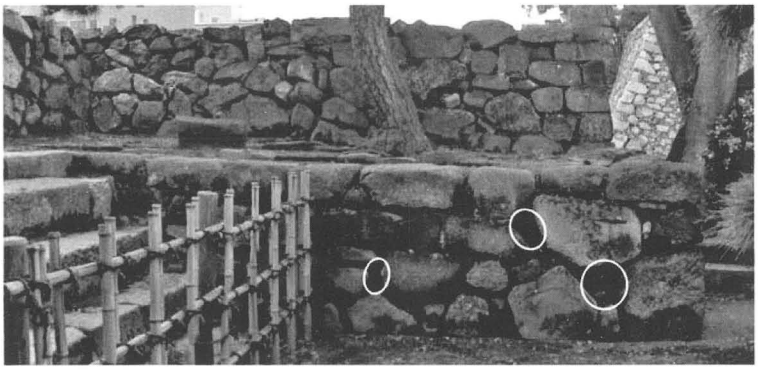


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2			a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.92	3.44	1.12	1.14	1.23	90	83	83	90	88

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



間詰石のヌケ

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

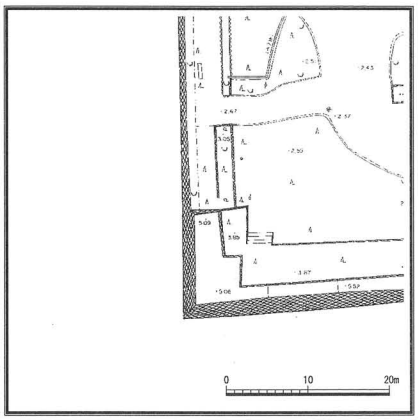
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南東部の多聞櫓台石垣の下段に腰巻状に取りつく東面内石垣であり、雁木の側壁である。 ・高さは中央部で約1.1m、全長は天端で約4.9mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。右隅角は割石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形のものが多いが、上段の2層はやや扁平な石材が使われている。規模は標準的なものが多いが、中段以下では小ぶりなものも多く見られる。 ・右隅角は算木積を意識した積み方である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』には描かれておらず、『旧高松御城全図』に描かれており、松平初期ないしは新郭造築期のものと考えられる。 ・中央の縦目地より左側は右側に比べ乱雑な積み方であり、明治以降に積み直されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3093	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石、切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法		乱積、布積	
方　位	北				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



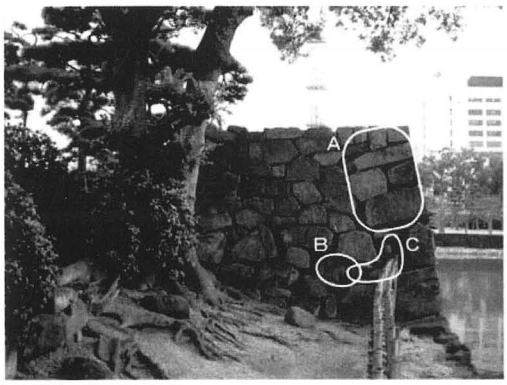
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s23							有	a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.94/3.12	6.9	1.2/2.03	2.57	2.77	88/76	87/84	81/78	83/73	68

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．算木完成
B．石材表面ハガレか奥に引っ込んでいるか
C．後世の詰め石
※左布積、右切込ハギ（一部亀甲積風）



備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

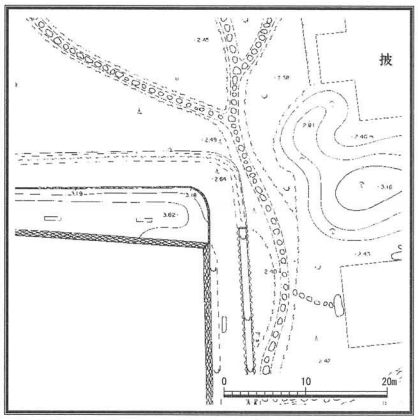
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南東部の多聞櫓台の北面石垣である。 ・高さは腰巻き部で約1.2m、櫓台部で約2.8mである。全長は天端で約6.0mである。 ・勾配は73～87度と変化する。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。左隅角は割石、右隅角は切石を用いて積み上げられている。 ・石材の表面はノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形で、規模も標準的なもので揃っている。 ・左隅角は算木積を意識した積み方で、右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見れない。
破損状況	・右半下部の石材にゆるみが生じ、全体に薄いハラミが見られる。 ・石材の一部に表面の剥離が見られる。 ・右隅角では後に詰め直されたと考えられる間詰石が見られる。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』には描かれておらず、『旧高松御城全図』に描かれており、松平初期ないしは新郭造築期のものと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3094	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	内				石積工法		谷積
方　位	東				角石(算木)	左	算木にならない
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材		花崗岩、安山岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.54	5.63	1.09	0.86	0.61	84	-1	82	77	77

築造時期	生駒期・明治以降	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状

※安山岩を主体とした谷積。後世のものと思われる。

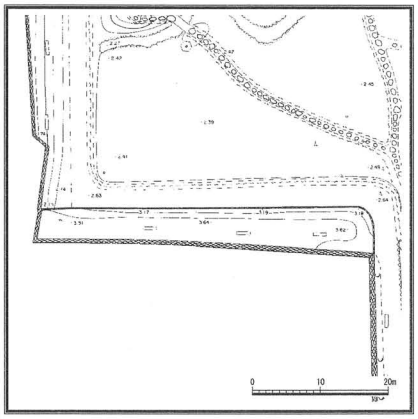
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸西部で、低い土塁の東面内石垣である。見学動線に沿う縁石となっている。 ・高さは0.6～1.0mと変化する。全長は天端で約5.5mである。 ・勾配は82度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた谷積である。右隅角は曲線となっている。 ・石材は方形の形状が揃ったものを用い、規模も標準的なものでほぼ揃っている。曲線部に安山岩が多く用いられている。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』によるとほぼ同位置に石垣が描かれており、生駒期から所在した石垣と考えられる。 ・現在の石垣は谷積であり、明治以降の積み直しが考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3095	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内				石積工法	谷積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	48.2	48.46	0.61	0.46	1.19	77	77	73/80	85/73	84/84

築造時期	生駒期	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状

※安山岩を主体とした谷積。後世のものと思われる。右端は当初のものか不明。

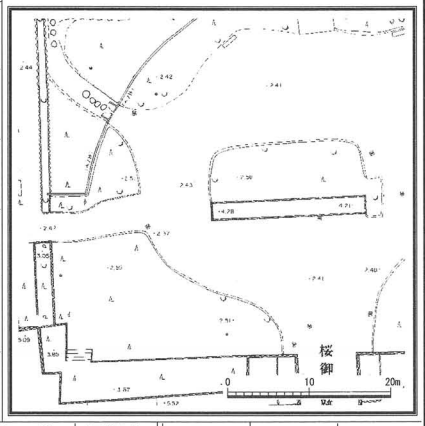
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸西部の低い土塁の北面内石垣である。見学動線に沿う縁石となっている。 ・高さは0.5～1.2mと変化する。全長は天端で約48.2mである。 ・勾配は73～80度と変化する。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた谷積である。 ・石材は方形の形状が揃ったものが多く、規模も標準的でほぼ揃っている。右隅角付近では大石や扁平な石材も見られる。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』によるとほぼ同位置に石垣が描かれており、生駒期から所在した石垣と考えられる。 ・現在の石垣は谷積であり、明治以降の積み直しが考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3096	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法	布積	
方　位	西				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	御番所				石材	花崗岩	
転用石	無				刻　印	無	

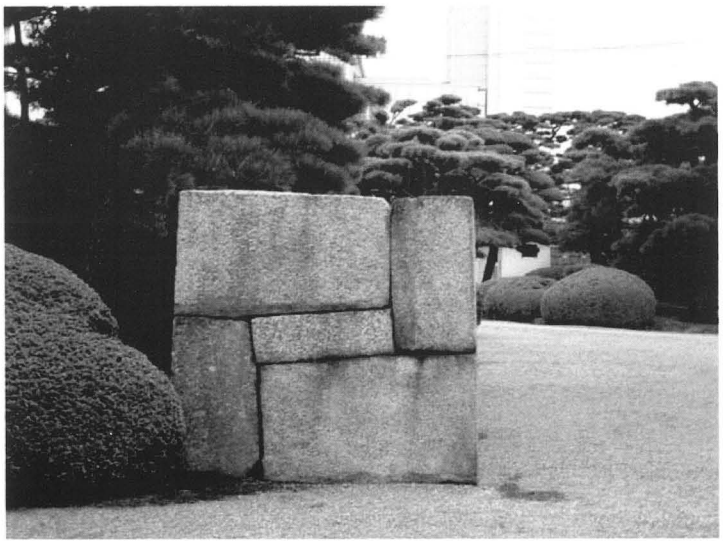


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.89	1.95	1.8	1.82	1.82	88	90	89	90	88

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『披雲閣古図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



※整美な切込ハギ。絵図にはない。

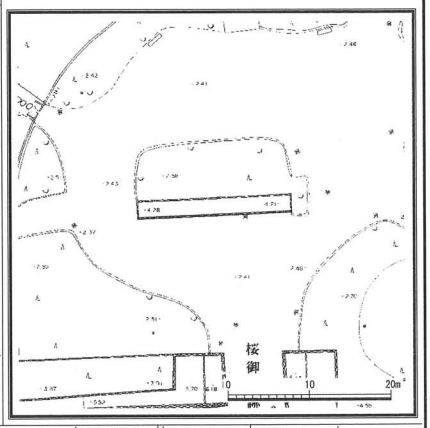
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の桜御門北側に独立して築造された石垣の西面である。 ・高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約1.9mである。 ・勾配は89度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の加工精度の高い切石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は大ぶりのもので揃っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『披雲閣古図』に本石垣を示したと考えられる構造物が描かれていることから、新郭造築期の披雲閣建設に伴って築造された石垣と考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3097	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法	布積、乱積	
方　位	南				角石（算木） 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	御番所				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

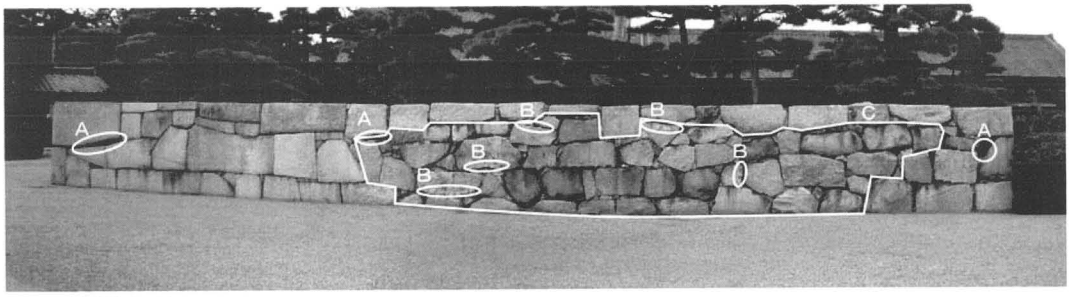


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s4		有	a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	18.74	18.74	1.82	1.84	1.85	88	87	88	90	85

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『披雲閣古図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．間詰石のヌケ
B．矢穴
C．積み方が異なる、モルタル詰め

※絵図にはない石垣

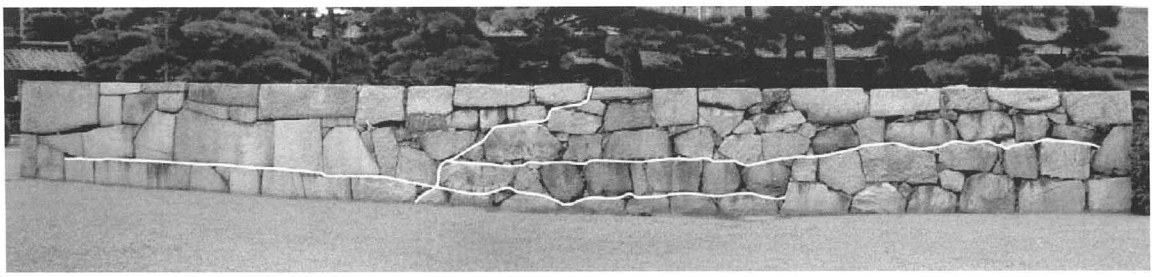
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の桜御門北側に独立して築造された石垣の南面である。 ・高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約18.7mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は左側と右側で異なり、左側では花崗岩の加工精度の高い切石を用いており、布積と乱積が混在する。右側では、やや加工精度の低い切石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形に揃えたものとやや丸みのあるものがあり、規模も大小混在する。 ・左隅角は完成度の高い算木積であるが、右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『披雲閣古図』に本石垣を示したと考えられる構造物が描かれていることから、新郭造築期の披雲閣建設に伴って築造された石垣と考えられる。

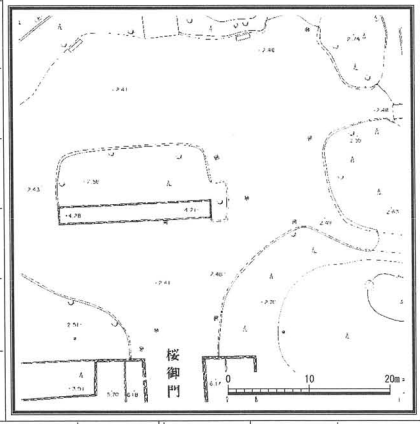
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
中央部天端から下部に至る左下がりの目地	左側	花崗岩	方形切石	左側石材は右側より大ぶり	切石布積	異なる加工精度の石材の使用
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	
中央より左側全面の意匠的な目地	全面	花崗岩	不定形切石	大小石材混在	切石乱積	意匠的石積工法
中央右側全面の横目地	全面	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	布積



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3098	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法		乱積	
方　位	東				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	御番所				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.99	2.12	1.85	1.84	1.57	90	90	88	90	88

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『披雲閣古図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

※絵図にはない石垣。表面より加工度は低い。

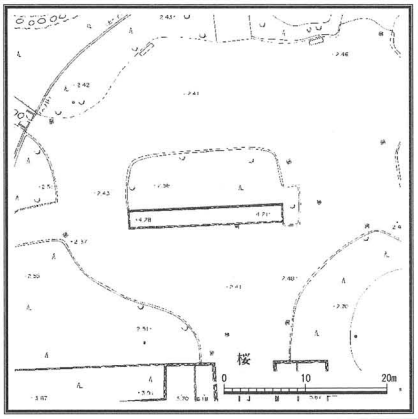
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の桜御門北側に独立して築造された石垣の東面である。 ・高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約2.0mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の加工精度の高い切石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は大小混在する。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『披雲閣古図』に本石垣を示したと考えられる構造物が描かれていることから、新郭造築期の披雲閣建設に伴って築造された石垣と考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3099	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法		乱積	
方　位	北				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	御番所				石材		花崗岩	
転用石	有（小穴のあく石）			刻　印			無	

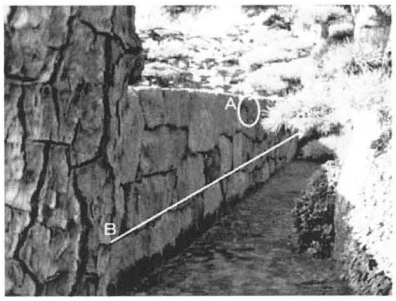


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2			a3	b2	D

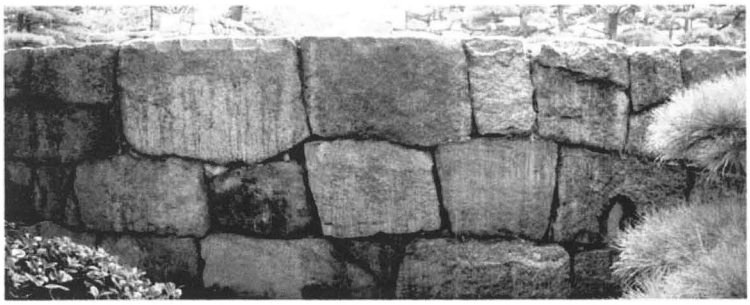
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	18.62	18.62	1.57	1.56	1.72	90	89	90	89	88

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『披雲閣古図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．転用石
B．横目地
※面に少し出入りあり



※絵図にはない石垣。
表面より加工度は低い。

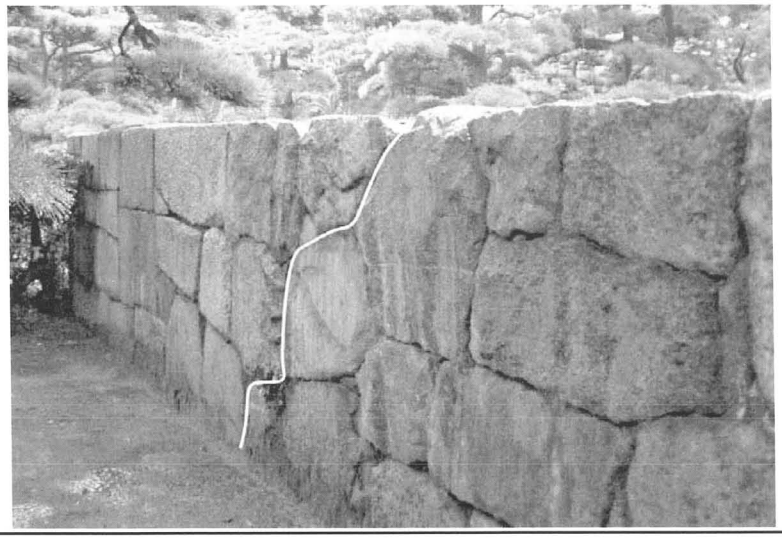
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は三ノ丸南部の桜御門北側に独立して築造された石垣の北面である。 ・高さは中央部で約1.6m、全長は天端で約18.6mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は、やや加工精度の低い切石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形に揃えたものとやや丸みのあるものがあり、規模は標準的でほぼ揃っている。 ・左隅角は算木になっていないが、右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『披雲閣古図』に本石垣を示したと考えられる構造物が描かれていることから、新郭造築期の披雲閣建設に伴って築造された石垣と考えられる。

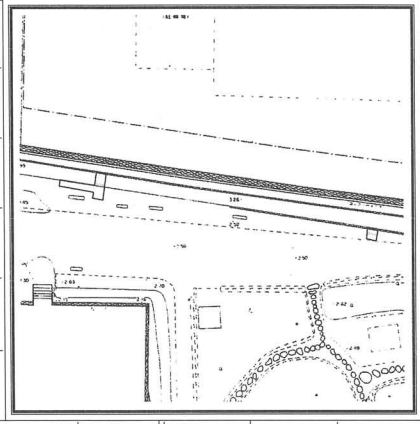
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
天端中央部から左下がりに下部に至る目地	左側	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	築造時の偶発的なもの
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3100	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法		
方　位	南				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角				角石（算木） 右		
	右隅角				その他特記		
上部構造物	－				石材	砂岩	
転用石	無			刻　印		無	

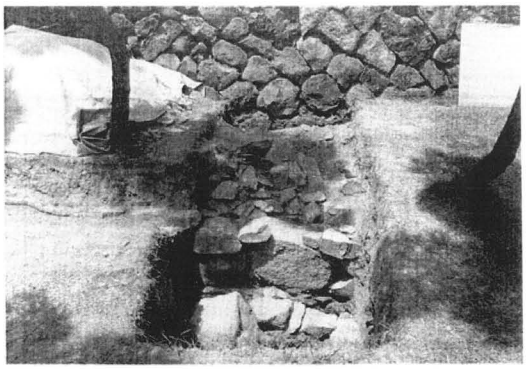


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配

築造時期	不明	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡（地久櫓跡・三ノ丸跡）』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



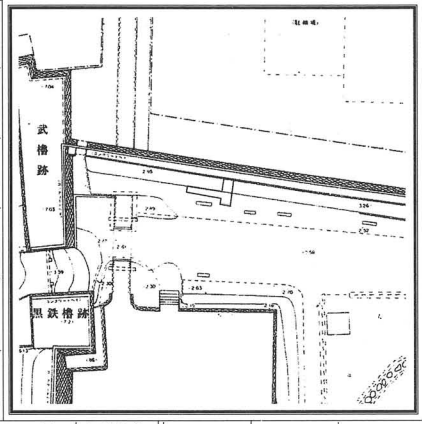
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北部の南面内石垣で、埋没している。 ・基底部の1段2石が検出されている。
積み方石材等	・石の積み方は砂岩の野面石を用いた乱積である。 ・石材は方形である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・大半が埋没しており、不明である。
石垣の変遷	・不明である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3101	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法		
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角				角石(算木) 右		
	右隅角				その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無				刻　印	無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配

築造時期	不明	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡(地久櫓跡・三ノ丸跡)』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

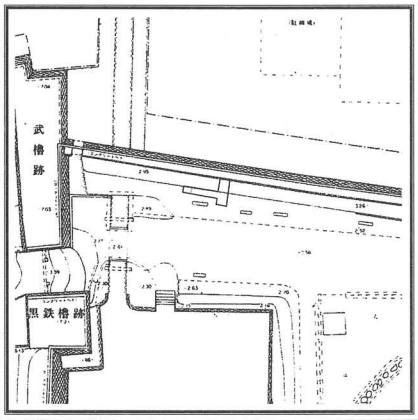
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・三ノ丸北部の北面内石垣で、埋没している。 ・基底部の1段4石が検出されている。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。 ・石材は方形である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・大半が埋没しており、不明である。
石垣の変遷	・不明である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3102	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法		
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角				角石(算木) 右		
	右隅角				その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

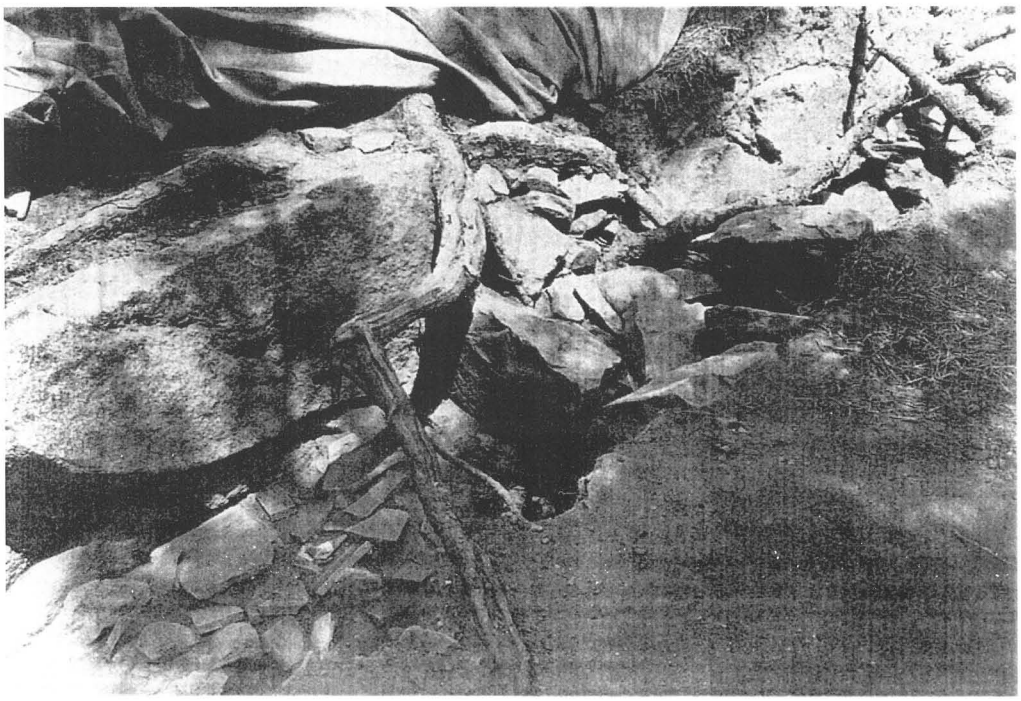


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配

築造時期	不明	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡(地久櫓跡・三ノ丸跡)』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



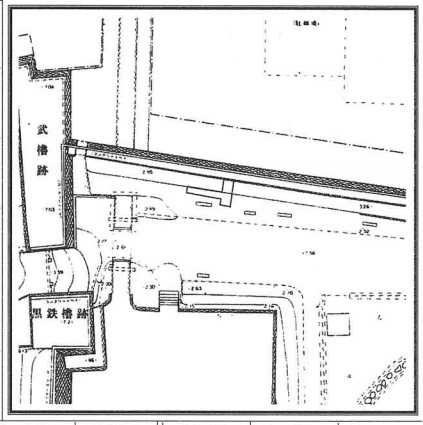
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸北部の西面内石垣である。 ・基底部の1段2石が検出されている。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。 ・石材は方形である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・大半が埋没しており、不明である。
石垣の変遷	・不明である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	3103	地区	三ノ丸	石垣様式	積み方			石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法			
方　位	南				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角					右		
	右隅角				その他特記			
上部構造物	-				石材			
転用石				刻　印				



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配

築造時期	不明	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡保存修理工事報告書』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			
破損現状					
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日		

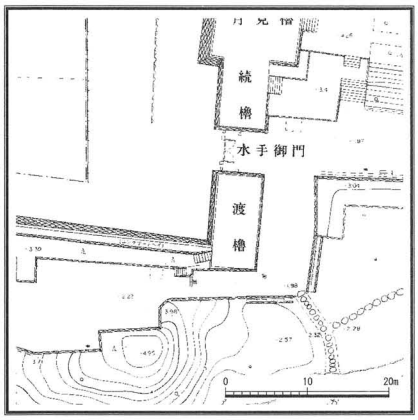
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は三ノ丸の西北部で内堀に面する南面石垣である。 ・現在の石垣より北側へ1m地点において、根石が東西方向に埋没している。
積み方石材等	・形状、工法等は不明である。
破損状況	・根石のみ残る。
石垣の変遷	・昭和48年度の修理の最中に、根石のみ埋没していることを確認し、そのまま埋め戻し現在の石垣を積み上げている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4001	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積
方　位	西				角石(算木)	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		ソリ
上部構造物	渡櫓				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

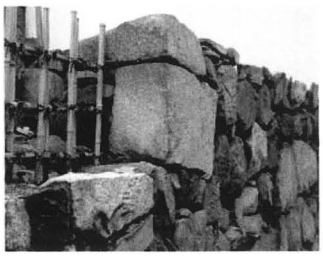
石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	右	1.15	1.09	0.7	-	0.95	83	86	-	81	83
	左	8.5	8.53	3.22	3.22	2.7	77	79	79	79	79

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査	『高松市文化財調査報告書　史跡高松城』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

矢穴

※算木長方形石使用
※方形石材多い



備　考	短い石垣のため中央高・中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 8日